



大学公式キャラクター
かなめ
要ちゃん

とどけ!ぬくもり
要(かなめ)から



西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

地域貢献活動報告

2024



目 次

巻頭言 地域連携室室長 荒木 剛	1
西南女学院大学・短期大学部の地域貢献活動の概要	2
《子ども・子育て支援と学校教育》	
1. 一緒にあそぼう	3
2. いぼりの森の《みんな、だぁ〜い好き!!》“みんな ♪フレアイ隊”	6
《食と健康》	
3. 「食と健康」に関する西南女学院大学・九州歯科大学連携公開講座	9
4. 乳がん検診啓発活動	12
5. 未活用農産物を商品化し SDGs に取り組もう！	14
《観光と地域活性化》	
6. 英語に茶レンジ！～旧安川邸で過ごす秋～	17
7. Sister Beach プロジェクト	19
8. 北九州市の修学旅行誘致の取り組み	21
9. 北九州魅力探求プログラム Do！起業学校	23
10. コクラニキタイ	25
11. つなぐヒカリプロジェクト 2024	27
12. 福岡県赤村源じいの森のキャンプ企画	29
13. 福岡県みやこ町・第一ピアサービス株式会社・ 西南女学院大学の三者連携活動の取り組み	31
トピックス	33
① 地域貢献活動交流会を開催	
② ギラヴァンツ北九州「防災」イベントに参加	
③ シニアサマーカレッジを開催	
④ JAL との連携による廃食油の回収	
⑤ 北九州エコライズステージに参加	
⑥ 北九州市 Z 世代課パートナーズの交流会に参加	
⑦ 「ちゃれんじ」の学生ボランティア活動レポートが「優秀レポート」に採択	
⑧ 松本清張誕生祭で発表	
⑨ 北九州市の食文化 伝統的発酵食品「ぬか炊き」の継承活動	
⑩ 「かなめキッズひろば」の提供	
⑪ 北九州市 「おいしい給食大作戦 学校給食応援団」に参加	
学生ボランティア団体「ちゃれんじ」活動レポート	38
2024 年度地域連携室の取り組み	
1. おはなしづくりワークショップ	40
2. 中国茶セミナー	42
3. 後期北九州市民カレッジ	45
4. 広報活動	47
2018 年度卒業生寄稿文 「今につながる力」	49
マスメディアに見る 地域連携室 2024 年度の歩み ～地域連携室の足跡～	50

巻 頭 言

地域連携室室長 荒木剛（保健福祉学部福祉学科）

『地域貢献活動報告 2024』を刊行するにあたり、ここに学生や教職員の方々をはじめ、地域貢献活動に携わって頂きましたすべての関係者の皆様に改めて感謝を申し上げます。ありがとうございます。

さて本学では、大学設立 30 周年を迎えるにあたり、2024 年 5 月に将来の基本構想をまとめた「西南女学院大学グランドビジョン 2030～とどけ！笑顔～」を策定いたしました。タイトルにもありますように、この基本構想のコンセプトは「笑顔」です。これを踏まえ本学ではさまざまな取り組みを進めていくこととなりますが、特に地域貢献の分野に関して言えば、地域をフィールドとした諸活動を通じて、「笑顔」溢れる地域づくりを目指していくこととなります。

また、2025 年度からは「地域総キャンパス」と称して、一般教養科目を大幅に改訂した教育カリキュラムが始まります。これは、地域全体をひとつのキャンパスに見立て、学内にとどまらない教育活動を展開することで、学生の学びと成長を促すものです。これまで取り組んできた地域貢献活動の学修として意義が改めて認識された結果だと言えます。

このように、本学では、これからの大学運営や教育活動において、よりいっそう地域貢献活動を拡充・推進していくこととなりますが、その成否は、地域の皆様といかに Win-Win の関係を構築できるかにかかっています。つまり、学生に活動の場や機会を提供したり、また一緒に活動したりすることに対して、地域の皆様が喜びや楽しみを見出してくれることが大変重要となります。

「西南の学生さんから元気をもらった」、「学生さんと楽しい時間を過ごせた」、「学生さんの活動で地域が活気づいた」。こうした声が地域の皆様から聞かれるためにも、学生を送り出す側として、改めて地域貢献活動を支える環境整備を行う必要があると感じています。そして、本学と地域の皆様をつなぐ窓口である地域連携室につきましても、地域貢献活動に携わるお一人おひとりの「笑顔」をしっかりとサポートできるよう、これからも与えられた役割と責任を果たしてまいりたいと考えています。

引き続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動（概要）

本学では感恩奉仕の建学の精神にもとづき、女性らしい豊かな人間力と専門的な実践力で社会に貢献する人材育成を目指しています。座学に加え、学生たちが自ら学外に出向き、さまざまな課題に向き合い、できることをみつけていくことを大切にして参りました。これまでの学生参加の地域貢献活動を活動形態別にみますと次の6つに分けることができます。

- ① 市民公開講座：最新の知識・技術、生活の知恵などを提供する講義や演習
- ② 体験・アクティビティ：あそぶ、たべる、学ぶ、語り合うなどの体験型の企画
- ③ ピアサポートグループ活動：介護や子育ての悩みなどを参加者同士で受けとめ支え合うグループ活動
- ④ 提案とアクション：若い女性の視点を取り入れた商品開発や地域活性化への提案とアクション
- ⑤ 海外における貢献活動：アジア地域での地域貢献活動
- ⑥ そのほか

また、課題別にみると6つに分けることができます。

- ① 健康・食・運動 ② 福祉・介護 ③ 子ども・子育て ④ 学校教育 ⑤ 産業・観光
- ⑦ 地域づくり

2024年度の地域貢献活動は13件でした。『地域貢献活動報告2024』では、課題別に＜子ども・子育て支援と学校教育＞及び＜食と健康＞＜観光と地域活性化＞に分類し（下表参照）、それぞれの1年間の成果と課題をまとめました。本書は、この1年間の学生たちと教職員が地域の皆様とともに歩んだ道のりをコンパクトにまとめたものです。これらが地域の皆様と私たちにとって共通の宝物となりますことを祈念しております。

表 2024年度に本学で実施された地域貢献活動

＜子ども・子育て支援と学校教育＞

- ・ 一緒に遊ぼう [障害のある子どもとそのきょうだい]
- ・ いぼりの森の《みんな、だぁ～い好き！！》“みんな♪フレアイ隊” [地域の未就園児]

＜食と健康＞

- ・ 「食と健康」に関する西南女学院大学・九州歯科大学連携公開講座
[栄養に関する仕事に興味がある高校生及びその保護者]
- ・ 乳がん検診啓発活動 [井堀市民センター周辺の地域住民、井堀小学校保護者]
- ・ 未活用農産物を商品化しSDGsに取り組もう！ [北九州市内農家、企業]

＜観光と地域活性化＞

- ・ 英語に茶レンジ！～旧安川邸で過ごす秋～ [市民、外国人観光客]
- ・ Sister Beach プロジェクト [観光客]
- ・ 北九州市の修学旅行誘致の取り組み [県外からの高校修学旅行参加者]
- ・ 北九州魅力探求プログラム Do！起業学校 [高校生他]
- ・ コクラニキタイ [市民]
- ・ つなぐヒカリプロジェクト2024 [市民]
- ・ 福岡県赤村源じいの森のキャンプ企画 [観光客]
- ・ 福岡県みやこ町・第一ピアサービス株式会社・西南女学院大学の三者連携活動の取り組み
[福岡県みやこ町の役員・職員・地域住民]

注) [] 内は協働のパートナーあるいは支援の対象です。

1. 企画名：一緒にあそぼう

2. 団体名：ちゃれんじ

3. 企画代表者 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 山本 佳代子

4. 概要

(1) 目的

障害のある子どもときょうだい、その家族を対象とし余暇活動支援を行う。参加者は、さまざまなレクリエーション活動を通し体験を重ねること、楽しく身体を動かしながら多様な動きを身につけること、仲間と体験を共有することを目的とする。また学生スタッフは、子どもたちや保護者との関りから、障害や障害を取り巻く環境についての理解を深めること、実践を通し場面に応じた声かけや関わり方を学ぶこと、プログラムの企画や実践の力をつけることを目的とする。

① 対象：障害のある子どもときょうだい、その家族

② 内容：レクリエーション活動・食育活動・ハイキング・ダンスワークショップ他

③活動場所：西南女学院大学・若松グリーンパーク他

(2) 実施日時・場所・内容・参加人数

活動日	場所	時間	プログラム	参加者	スタッフ
4月27日（土）	金毘羅山	10時から13時ごろ	おでかけ	3家族7名	10名
5月9日（木）	6205教室	10時半から11時半	ミーティング		10名
5月16日（木）	第二体育館	16時半～18時	校内宝さがし	3家族9名	10名
5月30日（木）	6205教室	10時半～11時半	ミーティング		8名
6月20日（木）	第二体育館	16時半～18時	ダンスワークショップ	4家族10名	11名
7月4日（木）	6205教室	10時半～11時半	ミーティング		15名
7月18日（木）	第二体育館	16時半～18時	外遊び	6家族15名	9名
10月2日（水）	6306教室＋リモート	12時10分～13時	ミーティング		18名
10月18日（金）	第二体育館	16時半～18時	ART	3家族8名	14名
10月23日（水）	6304教室＋リモート	12時10分～13時	ミーティング		18名
11月30日（土）	グリーンパーク	10時半～13時	収穫	6家族17名	12名
12月4日（水）	6304教室＋リモート	12時10分～13時	ミーティング		17名
12月14日（土）	大学調理室	9時～15時	クッキング クリスマス会	5家族13名	17名

(3) インシデントの有無

なし

5. 評価及び企画の妥当性と今後の課題

①参加保護者アンケートから

保護者アンケートで活動の満足度を問う項目において一番多かったのは、「非常に満足している」である。以下アンケートより抜粋

「どの活動にもいつも楽しく参加させて頂いています。子ども達もいつもちゃれんじの日を楽しみにしています。普段関わる事ないお姉さんたちと一緒に活動ができて、とても嬉しいのだと思います。」「収穫体験は、なかなかすることが難しいと思うのでとても嬉しく思います。学生さん方も子どもをしっかり見ていただけてすごくありがたいです。」「大変な子もいるのに一生懸命になって見ていただけてありがたいです。」

②学生スタッフアンケートから

アンケートに答えた学生スタッフの全員が、活動への参加を通し「自分自身の成長があった」と回答している。以下アンケートより抜粋

「子ども達が次にどんな行動を取るのか予想ができない中で先輩の姿を見たり、振り返り会でみんなの意見を聞いたりして、障がいのある子どもへの接し方を学び、多様な視点で臨機応変な対応ができるようになりました。また、たくさんの活動に参加し、子どもや保護者の方々とコミュニケーションを取っていく中で、きょうだいの気持ち、保護者の気持ちに寄り添えるようになったと思っています（4年生）。」「メンバーと考えながら企画を練ったり、活動したりすることで、『こんなことをしたら楽しんでもらえるかもしれない』ということや、『これは危ないかもしれないからしないでおう』など、企画や活動での視野が広がりました（3年生）。」「障害のある子どもとの関わり方を学んだこと（2年生）」

③課題他

課題は、学生スタッフ間の連携強化である。他学年、他学科の学生が活動しており、時間割や実習等で調整が難しく、振り返りのミーティングと活動時間以外でスタッフ全員が集まる時間を確保することが難しい。振り返りのミーティングや次回活動の打ち合わせは、参加子どもたちの安全を確保するために行っているため、時間の調整をし、学生がスタッフとしての意識を維持できるような働きかけを行っていききたい。それに加え、スタッフ同士の関係づくりを深める時間を確保していくことも課題として挙げられる。

また今年度は、「学生ボランティア団体助成事業」において、学生スタッフが提出したレポートが「優秀レポート」として採択され活動助成金として 10 万円が贈呈された。これまでの活動実績及び活動を通した学生の学びが評価されたと考えられる。

6. 決算

西南女学院大学地域貢献活動助成金 5 万円

7. 謝辞

活動に参加し、共に学生指導に取り組んでくださる看護学科の樋口由貴子先生、毎年、食育活動にご協力くださる若松グリーンパークの皆さま、栄養学科の山田志麻先生とゼミ生の皆さまに御礼申し上げます。

8. 写真資料



おでかけ
(金比羅山)



ワークショップ
(学内)



ART 活動
(学内)



野菜収穫
(グリーンパーク)



クッキング・クリスマス会
(学内)

1. 企画名 いぼりの森<<みんな、だぁ〜い好き！！>>
 み ん な ♪ フ レ ア イ 隊

2. 主催者名 北九州市立井堀市民センター

3. 企画代表者 短期大学部保育科 藤田稔子

4. 概要

(1) 活動の概要と目的

毎年、校区内にある北九州市立井堀市民センターで月 1 回、0・1・2 歳のお子さんと保護者を対象に子育て支援活動を月に 1 回のペースで続け、今年で9年目になり、また、最後の年となりました。

今年は、4 名の学生が年間を通して活動しました。活動そのものの準備の他、手作りの出席カードやお誕生日カード、毎回配布する「いぼりしんぶん」等もゼミの時間以外に集まって作業をしていました。また、今年度も、学生達の空きコマで年間スケジュールを立てていましたが、直前になり、時間割が変更となり、予定していた時間に選択科目が入り大変困りました。年間スケジュール決定後であったため、4 月 5 月の 2 回は、学生 1 名だけで実施するという、今までにない状況がありましたが、センターの方々のご協力により無事に実施できました。

(2) 内容

場所：北九州市立井堀市民センター 多目的ホール

時間：9：20-10：00

開催日	テーマ	内容	参加者数
4 月 12 日	今日は、ラーメン屋さん	《ごっこあそび》 毛糸やフェルトで麺や具材を準備。お鍋で調理して、丼に盛りつけました。	児 6 名 親 6 名
5 月 10 日	春 🌸 ぽかぽか 虫さん達のお散歩	《製作あそび》 シールでテントウムシを作った後は、芋虫さんを作って一緒にお散歩。	児 5 名 親 4 名
6 月 14 日	6 月の幸せな花嫁	《感覚あそび》 ベールを付けておめかし。集めたお花をフワフワ飛ばして遊びました。	児 4 名 親 4 名
7 月 12 日	楽しい夏祭り	《ごっこあそび》 屋台でお買い物や金魚すくい等、楽しみました。	児 4 名 親 4 名
10 月 11 日	もみじがいっぱい	《絵画あそび》 手や足に絵具を付けて、みんなで大きな作品を完成させました。	児 6 名 親 5 名
11 月 8 日	ドキドキお芋ほり	《製作あそび》 パネルシアターを楽しんだ後、お芋を掘って、焼き芋にしました。	児 2 名 親 2 名
12 月 13 日	新年の手作りカレンダー	《製作あそび》 好きなパーツを選んで、毎年使えるカレンダーを作りました。	児 5 名 親 5 名
1 月 10 日	パンダになっちゃった	《運動あそび》 パンダに変身して、パンダなりきり体操をする予定でした。	中止

5. 振り返り

学生達の振り返りの一部を以下に記します。

① 自身のスキルアップ

★いぼりの活動を通して製作物等を作ることで、自分自身の創造力や製作力が伸びたと感じています。実際に、子ども達の行動、反応等のイメージを話ながら皆で案を考えたり、役割分担して話しながら製作することが楽しかったです。

② 未満児（3歳未満の子ども達）との関わりの経験値

★未満児との関わりにおいて、製作をする時にどんな風に言葉で伝えたらいいかな？、どんな声掛けをしたらどんな反応を返してくれるのかな？等、あまり経験がなくわからなかったことが、いぼりで子どもとの関わりで学ぶことができました。

★実習では、なかなか未満児の設定保育の機会がなく、想像することも難しく感じていましたが、いぼりの活動を通して、実際に未満児と関わることができ、どんなことが好きなのか、興味があるのかを知ることができました。このことは、今後就職して未満児の保育にきっと役立つと思っています。

③ 継続することの意義

★今までの先輩達が9年間やってきたからこそ、センターの方々との絆があって、準備や片付けで急いでいる時や困っている時にすぐに声を掛けてくれ手伝ってくださいました。継続することは、人と人との繋がりに大きな力を与えるのだと感じました。

④ 『地域』を意識

★地域の人との関わりをすごく感じて、ずっと来てくれている人や、初めて来てくれた人も大学祭にも来てくれて、井堀を通しての繋がりが広がったように感じました。

6. 活動経費

井堀市民センターの経費から材料費全額支出いただきました。

7. お礼

いつも活動を支えてくださる、井堀市民センター館長の内藤さま、井上さまはじめ皆さまには心から感謝申し上げます。また、毎回楽しみに、参加してくださるお母さま、子ども達、ありがとうございます！！

今年度でこの活動も最後となります。9年間、この活動を通して、たくさんの出会い、発見、学び、喜び…、言い尽くせない程の恵みをいただきました。1番最初に参加してくれた女の子は、学生達の卒業式にお花束を持ってきてくれました。その一番下の妹さんが、今年最後の参加者です。兄弟姉妹の成長も共に見させていただきました喜びを感謝いたします。この活動を共にしてくださいました、学生（卒業生）、子ども達、お母さま達、センターの皆さま、本当にありがとうございました。

【活動の様子】子ども達の作品集



5月 みんなの“テントウムシ”は、センターの掲示板でご披露



7月 タコ焼きの屋台では、自分でコロコロ焼きました



10月 この手で作品を生み出しました。(笑)



← 11月 掘ったお芋は毛糸でおめかし

1月 干支と数字と曜日は、好きな色のパーツを選びました
↓



1. 企画名 「食と健康」に関する西南女学院大学・九州歯科大学連携公開講座
～治療食（嚥下食）の調理体験～

2. 主催者名 西南女学院大学保健福祉学部栄養学科、九州歯科大学歯学部口腔保健学科

3. 企画代表者 西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 高崎智子（文責）

企画参加者 西南女学院大学保健福祉学部栄養学科

高崎智子、渡邊和美、黒岩かすみ、中村愛奈、学生7名

九州歯科大学歯学部口腔保健学科

邵 仁浩、中道敦子、辻澤利行、船原まどか、磯部彩香、学生5名

（当日の悪天候のために、九州歯科大学の教員・学生は不参加となった）

4. 概要

（1）背景および目的

栄養と口腔機能は密接に関連している。乳幼児期から高齢期に至るまで、噛む・飲み込むなどの機能を担う歯や口の健康は大切であり、栄養摂取と口腔内環境についての正しい知識を得ることが重要となる。そこで、本学栄養学科と九州歯科大学口腔保健学科は連携して、2014年度より「食と健康」に関する公開講座を開講してきた。本学は「栄養」の立場から、九州歯科大学は「口腔保健」の立場から、地域住民に対して多職種からなる啓発活動を行うとともに、専門課程で学ぶ学生にチームとしての活動の機会を提供している。

今回の公開講座では、病気の治療を支える食事療法の一つである嚥下食について、調理経験の少ない参加者でも楽しく学ぶことができるよう、手軽な献立を実際に調理する体験型の講座を開講することを試みた。治療食の調理体験を通して、適切な食生活の在り方と噛むことの大切さや、栄養と口腔保健の連携の必要性を学ぶことを目的とした。

（2）対象者および開催日時・開催場所

対象者： 高校生およびその保護者等

開催日時： 2024年11月2日（土）10：00～13：00

開催場所： 西南女学院大学 4号館1階

（3）実施内容

・参加者： 高校生およびその保護者 計4名

・栄養学科による「治療食（嚥下食）の調理体験」

講師：西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 教授 渡邊和美（管理栄養士）

献立名：全粥、パン粥、具なし茶わん蒸し、鶏ひき肉と豆腐のつくねハンバーグ、

南瓜のピューレ、白桃ヨーグルトスムージー、水ゼリー

・口腔保健学科による講演「食べ方について」

講師：九州歯科大学歯学部口腔保健学科 講師 船原まどか（歯科衛生士）

・学生作成ポスター発表

・お口の相談会

・健康度チェックコーナー： 骨密度測定、体組成測定、ブラッシング指導等

(当日は豪雨による悪天候のために、参加予定者の一部、および九州歯科大学の教員・学生、本学学生の一部は参加することができず、予定していた九州歯科大学による講演や相談会等を中止して実施した。)

嚥下食を調理する前に、まず、「摂食嚥下学会分類 2021」を紹介した。摂食・嚥下に関する能力に基づいた食品の形態について講義し、これから作る献立が対応する嚥下段階についての知識を得た。その後の調理では、栄養学科の学生が主導して指導した。調理体験の後には、栄養学科学生による骨密度測定、体組成測定等を実施した。

(4) 参加者へのアンケート結果 (抜粋)

- ・参加者： 高校生およびその保護者 計 4 名 (男性 1 名、女性 3 名)
- ・体験型の講座について： 4 名全員が「楽しかった」と回答
- ・普段の料理経験： 高校生 2 名ともに「よく行う」と回答
- ・調理体験で楽しかったこと：

親子で一緒に作ったこと。大学の学生と一緒に調理したこと。普段作ることのない嚥下食を作ったこと。実際に嚥下食を調理して食べたこと。片栗粉を使用した料理がたくさんあると知ったこと。等
- ・嚥下食を作ってみての感想：

意外と簡単にできたので、ポイントを押さえれば家庭でも作れそうな気がした。作る必要のある状況を迎えた時に対応していきたいと思った。祖父母に作ってあげようと思った。以前から興味を持っていた嚥下食について知ることができたので、また参加したい。等

5. 評価

連携公開講座当日は、悪天候と交通機関の乱れのために、九州歯科大学の教員・学生や本学学生の一部は参加することができなかったが、参加予定者に連絡をとり、参加を強く望んだ方々に対して、予定していた内容を短縮して公開講座を実施した。

今回は、治療の一環として提供される治療食として、家庭でも簡単に作れる嚥下食を紹介した。「摂食嚥下学会分類 2021」に基づいた嚥下食については、栄養学科の学生が実習を通して既に学んだ内容であったことから、学生が主導して参加者を指導しながら調理を行った。調理体験であるため、参加対象者を高校生以上としたが、今回の参加者は、普段から調理する機会が多く、栄養や調理に対する関心が高かったため、学生たちと歓談しながらスムーズに作ることができた。

アンケート結果より、参加者の方々には、治療としての食事について学び、治療食を家庭でも作れる身近なものとして知っていただくことができたと考える。栄養の専門職について理解し、口腔ケアや嚥むことの大切さ、食事への関心を深めることにつながったものと期待する。

学生にとっては、授業で学んだ知識や技術を提供する場となり、専門職としての意識を高める機会を得ることができたと考える。

6. 企画の妥当性と今後の課題

今回の公開講座は、多職種連携チーム医療の一員として活動するべく栄養と口腔保健の専門職を目指して学ぶ学生たちが、授業で修得した知識や技術を基に、連携して啓発活動の機会を持つことができるよう企画した。栄養と口腔保健の連携の必要性は重要視されており、学生たちが調理などの体験型活動を通して嚥下等について学ぶことは実践的な経験となる。また参加者も「食と健康」について楽しみながら学ぶことができる。当日の悪天候により口腔保健学科による企画を急遽中止せざるを得なかったことは残念であったが、栄養学科と口腔保健学科の学生が交流する貴重な場となるため、今後も継続して活動していきたい。例年、3年次学生が参加しているが、1～2年次学生が参加したり、幅広い年齢層の方が参加したりしやすい企画についても検討していきたい。

7. 活動経費

西南女学院大学地域貢献活動助成金 50,000 円

8. 添付資料

全身の健康はお口から！ 西南女学院大学 栄養学科 九州歯科大学 口腔保健学科

連携公開講座

栄養学科では、九州歯科大学と連携して公開講座を開催しています！
お口と栄養の関係 楽しく学んでみませんか

参加料 無料

2024年 11月2日(土) 会場：西南女学院大学 4号館
10:00～13:00

- ・栄養学科による「治療食(嚥下食)の調理体験」
食事は病気の治療を支えます
家庭でも簡単に作れる治療食に Let's Try!
講師：西南女学院大学 教授 渡邊和英 (管理栄養士)
- ・口腔保健学科による講演・お口の相談会
九州歯科大学 歯科医師、歯科衛生士
- ・健康度チェック
骨密度測定、身体組成測定 etc

お問い合わせ先 申し込みはこちらから！

〒833-0835 福岡県糟屋郡志摩町1-3-5
西南女学院大学 保健福祉学部 栄養学科 4号館
TEL・FAX: 093-583-5802

※申し込みに際しお口の相談は個人情報は、西南女学院大学個人情報保護に
関する規約に基づき、適切に取り扱います。

開催：10月10日(水) まで
先着 40名様

告知ポスター

学会分類2021				他分類			
学会分類2021	嚥下食	特別用途食品	UDF	スマイルケア	学会分類2021	嚥下食	特別用途食品
0j	たんぱく質含有量が少ないゼリー	0j	たんぱく質含有量が少ないゼリー	0	0j	L0 (開始食)	0
0t	たんぱく質含有量は増えつつあるが、たんぱく質含有量が少ないこと	0t	たんぱく質含有量は増えつつあるが、たんぱく質含有量が少ないこと	0	0t	L3の一部 (とろみ水)	0
1j	たんぱく質含有量は増えつつあるが、たんぱく質含有量が少ないこと	1j	たんぱく質含有量は増えつつあるが、たんぱく質含有量が少ないこと	1	1j	L1・L2 (嚥下食1・2)	1
2-1	均質で、なめらかなもの (あまりさらさらしないこと)	2-1	均質で、なめらかなもの (あまりさらさらしないこと)	2	2-1	L3 (嚥下食3)	2
2-2	やわらかい粒等をきく、不均質なものをきく	2-2	やわらかい粒等をきく、不均質なものをきく	2	2-2	L3 (嚥下食3)	2
3	形はあるが、歯や入れ歯がなくとも口腔内で押しつぶし、塊状形成が容易なもの	3	形はあるが、歯や入れ歯がなくとも口腔内で押しつぶし、塊状形成が容易なもの	3	3	L4 (移行食)	3
4	形があり、かたすぎず、ほろにけにくく、すりつぶさなくても、手で切れるやわらかさ	4	形があり、かたすぎず、ほろにけにくく、すりつぶさなくても、手で切れるやわらかさ	4	4	L4 (移行食)	4

「摂食嚥下学会分類 2021」



治療食について講義



治療食調理実習



治療食完成

1. 企画名：乳がん検診啓発活動

2. 企画代表者：西南女学院大学 保健福祉学部 看護学科 吉原悦子

3. 概要と目的

乳がんの罹患率は増加傾向であるにもかかわらず、検診の受診率は低いのが現状である。そこで本学、井堀市民センターと井堀小学校 PTA の家庭教育学級との連携にて乳がん検診の啓発活動を行うこととした。

乳がんに関する知識を持ってもらい、ひとりでも、自己検診を行い、乳がん検診に関心を持ち、乳がんの早期発見につなげることを目的とする。

4. 実施内容

日 時：2024 年 9 月 11 日（水）13：30～14：30

場 所：井堀市民センター 多目的ホール

参加者：14 名

井堀市民センター周辺にお住まいの方、井堀小学校保護者、井堀市民センター職員、
小倉北区役所コミュニティ支援課職員

学生参加者：5 名

内 容：前半は、「乳がんとは」のテーマで学生がこれまで学んできたことを踏まえ、参加者に知ってほしい知識について発表を行った。その後、自己検診の方法を説明し、乳がん自己検診の体験をじっしした。学生は各ブースで、乳がんの自己検診モデルを使用し、実際に参加者に乳がんモデルを触診しながら、触診の方法、頻度など自己検診法について説明を行った。

インシデント：特記事項なし

5. 振り返り

①準備について

啓発活動の内容について、学生主体で準備を進めてきた。乳がん看護認定看護師を講師に招き、学習会を行った。どのように伝えるとわかりやすいのか、どこまで伝えたらよいのか積極的に質問を行った。また、資料を作成する段階でも、指導を受けてきた。

②当日の運営について

当日は、学生も緊張しており、乳がんに関する知識についての発表が当初の予定より早く終了したため、乳がんモデルの触診の時間を多くとることとした。その中で、学生たちは乳房の触診の仕方を丁寧に伝えることや生活の中に触診を取り入れる工夫点などを、これまで学んできた「ブレストアウェアネス（乳房を意識する生活習慣）」の視点で参加者に伝えることができていた。また、ブースを 2 つ設けたため、少人数でのかかわりを行うことができ、個別に話をすることができたこと、参加者同士でかかわることもできた。

6. 評価と今後の課題

①参加者からの評価

参加者のアンケートの結果では、乳がん検診に行ったことがある参加者は、64%であった。参加後、乳がん検診を受診しようと思ったかについては、「そう思う」と答えた割合は 93%で、乳房を触ってみようと思ったかでは、100%が「はい」と答えていた。また、自由記載でも「この講座をきっかけにセルフチェックを行ってみようと思う」「乳がん検診について気にはなっていたが放置していた、すぐ予約しようと思う」「わかりやすかった」「乳がんモデルを触れてよかった」と記載されており、乳が

ん検診や自己検診について関心を寄せることができたと考え、目的は達成できたといえる。

②学生の学び

- ・人に伝えるためにはまず自分に知識がなければならぬことを再認識できた。
- ・乳がんモデルなどの媒体を使用することで相手の興味関心を引き付けることができるとわかった。
- ・一方的に説明するのではなく、質問を投げかけたりし、反応を待ったりすることが大切だった。
- ・自己検診をしましようということだけを伝えるのではなく、具体的な頻度や時期を提案するとわかりやすいと思った。
- ・パワーポイントを制作する際は文字を大きくしたりし、イラストや写真を用いると分かりやすいと感じた。
- ・実際に乳がんを経験した方が参加されており、その方への配慮や関わり方を考えて行った。
- ・チラシを制作する際には具体的な内容や何をするのか分かるように記載することを学んだ。
- ・病院内だけでなく地域の人々に啓発活動を行うことで疾患の早期発見に繋げることが出来る。
- ・将来看護師として働くにあたり、身についた知識や相手の思いを尊重しながら関わる力が養われたと思う。

③今後の課題

看護学科では、地域の中で活動する機会は少なく、今回の実践は、地域で生活する人々への健康支援を考えることであり、この実践を通じて得られたスキルや経験は、今後に活かすことができるといえる。また、共生社会に向けた専門職の育成の視点からも看護学科の学生が地域活動にかかわる機会を作り、住民とのかかわりなどを持つ支援をしていく必要があると感じている。

5. 決算：西南女学院大学地域貢献活動助成金

6. 謝辞

今回の活動を行うにあたり、ご協力いただきました、井堀市民センター館長様、職員の皆様、井堀小学校校長先生、PTAの皆様、また、乳がんについてご教授いただきました製鉄記念八幡病院 乳がん看護認定看護師 後藤元子様、活動に参加してくださった皆様に関心を持っていただき、心より感謝申し上げます。



活動の様子

1. 企画名 未活用農産物を商品化し SGDｓ に取り組もう！

2. 主催者名 西南女学院大学保健福祉学部栄養学科、株式会社九州電力北九州支店、株式会社 ASP（本社大阪市）、北九州市農林水産部農林課

3. 企画代表者 西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 坂田郁子

協働企画者 西南女学院大学保健福祉学部栄養学科 山田志麻、船越淳子

活動学生 栄養学科2年生13名、栄養学科3年生5名

4. 概要

（1）背景および目的

2015年9月の国連サミットにおいて、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）」が、採択された。先進国・途上国すべての国を対象に、経済・社会・環境の3つの側面のバランスがとれた社会を目指す世界共通の目標として、17のゴールとその課題ごとに設定された169のターゲット（達成基準）から構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っている。

北九州市は、食べられるのに捨ててしまう食品を活用した商品開発を、地域の農家や企業（地元企業、起業を考えている企業）と連携して取り組み、食品ロスの削減と持続可能な食環境の実現を目指している。そこで、食を通して人々の健康づくりを支援するSGDsの視点を踏まえた食環境整備について学んでいる栄養学科の学生が、北九州市の特産である「トマト」「キャベツ」「たけのこ」の未活用部分を利用した商品化を目指し、地場産業の発展さらには北九州市SGDsの取り組みにも貢献することを目的とした。

なお、この事業は、2024年1月20、21日に北九州市でおこなわれた「第2回クアトロヘリックスキャンプ※」事業の一環として実施した。

※クアトロヘリックスキャンプとは、北九州市で起業したい「スタートアップ企業」とそれを支援したい「地元の企業と行政」および地域の未来を形作る「学生や市民」とのオープンイノベーションを目的とした合宿である。これにより、議論の方向性が一致した団体がチームを組み、資源が循環する社会の構築を目指し、地方のサステナビリティ社会の実現を目的とした事業を企画実施したものである。

（2）活動日時・場所および内容

①未活用農作物に関する講演

講演日：2024年4月25日（木）2限目 8101教室

参加者：栄養学科2年生（全員）、3年生、4年生（希望者のみ） 計50名

内容：未活用農作物を利用した商品開発活動を実施するにあたり、株式会社ASP林直樹氏より「未活用の農作物の現状とこれまでの活用例」について、講演を行った。



②開発商品の検討（6回）

活動日程：2024年6月13日、27日、7月18日、8月8日、
9月12日、26日（各日程の2限目） 8101教室

内容：商品コンセプトの検討（食品の選定、班分け、進め方）、
開発商品の検討（ニーズ調査、商品分析、商品の決定）を行った。



③企画商品の試作・アンケート調査

試作日（2回）：2024年10月10日、24日（各日程の2限目） 開催場所：412 調理実習室

内容：2回の試作を行い、企画商品のレシピを決定した。

アンケート調査：10月26日（土）10：00～16：00 開催場所：西南女学院大学 学園祭

内容：西南女学院大学学園祭来場者を対象として、企画商品の試食を配布し、アンケート調査を実施した。

試 作



学園祭 アンケート調査



④企画商品の品評会

品評会のための打ち合わせ（2回）：2024年10月31日、11月7日（各日程の2限目）

企画商品の品評会：2024年11月9日（土）10：00～16：00

開催場所：412 調理実習室

内容：学園祭でのアンケート結果をもとに企画商品の改良ならびに品評会でのプレゼンテーション資料を作成した。

企画商品（トマト）



企画商品（キャベツ）

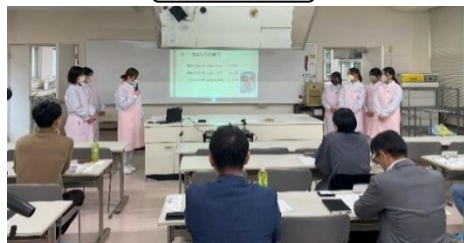


企画商品（たけのこ）



品評会は、6社の食品関連企業に参加いただき開催した（参加企業：オッカン本舗、三栄興産、響灘菜園、井筒屋、西日本鉄道、博多大丸）。企画商品のプレゼンを行い、試食後アンケート評価を実施し、企画商品の実用化に向けた講評を頂いた。さらに、アンケート評価より、企画商品の中から高評価の商品を選定した。

品評会



修了式



5. 評価

①未活用農作物に関する講演

未活用農作物の減少は食品ロス量や環境負荷の軽減につながるため、その重要性を周知できた。また、本講演の受講によって、未活用農作物を利用した商品開発活動への意欲的な参加に繋がったと考

えられる。

②開発商品の検討

食品カテゴリは「たけのこ」「キャベツ」「トマト」と決定し、カテゴリごとにグループを編成した。各チームにおいてリーダー、サブリーダーを選出し、顧客ターゲット層や商品コンセプトを決定した。さらに、商品ニーズの調査結果や株式会社 ASP 林 直樹氏のご助言を基に企画商品を決定した。

◎キャベリング（たった一つのお菓子からからだと心を健康に 簡単野菜）

◎トマ子ソース（トマトが苦手な人でも美味しく軽く食べられる！～トマトの苦手意識をなくし、トマトを食べるきっかけを作る～）

◎たけのこスティック（手軽に身近にタケ活！ 美意識をもつ、肌をキレイに保ちたい方におススメ）

③企画商品の試作・アンケート調査

全 2 回の試作によって、企画商品の詳細なレシピ、調理工程を決定した。その後、本学の学園祭来場者 57 名を対象として、アンケート調査を行った結果、各カテゴリの企画商品においても「味」「見た目」「商品コンセプト」では高い評価を得られた。

④企画商品の品評会

品評会では、各カテゴリの企画商品ごとに味、見た目の良い点、改良が必要と思われる点について様々な意見を頂戴することができた。また、アンケート評価によって、「たけのこスティック」が最も高い評価を得られた。

本活動で企画した商品を実用化させるために、学生たちは「他の商品と差別化」という点に大変苦慮していた。試作では、材料の配合や選定、調理工程の検討を繰り返し行い、形にすることができた際には、喜びと安堵感が見られた。これらの活動を通して、学生たちは、大学で学んだ知識を活かして、アイデアやイメージを商品化できることの喜びや達成感を経験でき、商品開発の魅力発見につながったと考える。

6. 今後の活動

今後の活動として、まずは品評会で高評価であった「たけのこ」チームの企画商品の商品化を目指して以下の活動に取り組みたいと考えている。

① 商品形態

材料の量・コストの検討、春季限定出荷集荷品であるため原料化プロセス（ストック化）を検討する。また、提供方法、食感や外観、たけのこの使用部位について検討を行う。

② 商品量産化に向けた検討

学生の考案したレシピをもとに、製造委託先や販売ルートの検討を行う。

7. 活動経費

西南女学院大学地域貢献活動助成金 5 万円、九州電力北九州支店からの試作材料費助成。

8. 謝辞

本事業実施に多大なる協力をいただきました株式会社九州電力北九州支店、株式会社 ASP（本社大阪市）、北九州市農林水産部農林課の皆様には感謝申し上げます。

企画名 英語に茶レンジ！～安川邸で過ごす秋～

団体名 スワンソン4年生ゼミ（通称：マルゼミ）

企画代表者 人文学部 英語学科 マルコム・スワンソン（英語学科長）

メンバー 人文学部 英語学科 4年 松本望花 岡部光華 長崎靖子 浦田碧衣 佐久間詩織 伊藤ゆな
多田夢璃愛 石飛ひな子 八尋えりい

概要

(1) 活動の目的

北九州市の有形文化財である旧安川邸に外国人を含む多くの方々に、旧安川邸の魅力、地域の魅力を発見していただける機会として、英語学科の特性を活かし、邸内で英語ガイドを行うとともに、日本茶や和菓子の美味しさを身近に感じていただくための「お茶会」を企画する。また、歴史的な建物について学ぶ機会が少ない若者や、日本に住まれている外国人の方に日本文化体験や、日本語と英語に触れる活動を提供することで異文化理解に努める。

(2) 活動内容・活動場所・活動内容の詳細

活動内容	活動場所	活動内容の詳細
・安川邸担当者との打合せ	旧安川邸	・イベント内容、目的、場所、来客人数などの打合せ。 ・ゼミ内で整理した内容を報告し、分からない部分を質問、アドバイスを受ける。
・茶道部との打合せ ・茶道練習 ・茶道用語翻訳	本学内	・茶道部より茶道について指導。 ・茶道部とお茶会の方針、受付・予約方法について打合せを行い、お茶席とお菓子席の流れ等を確認、練習。 ・茶道用語の英訳、道具の説明や茶道のルール説明などの書類作成。
・ポスター作成	本学内 旧安川邸	・安川邸からのアドバイスをもとにイベントの詳細をまとめポスター（案）を作成。ポスターとフライヤーの2種類を安川邸にて準備。
・パンフレット、Webサイト作成	本学内	・安川邸前館長から頂いた旧安川邸に関する資料や当時のパンフレットを考察し、改善案を作成、長文表記については、QRコードを読み込みWebサイトで情報を得ることができるような仕組みを提案。
・受付担当打合せ	本学内	・ガイド担当やお茶会担当と連携して、書類作成、予約の流れを決定。
・ガイド打合せ	本学内 旧安川邸	・前館長から頂いた安川邸に関する資料をもとにガイド内容の作成とその英訳、受付などの予約方法を打合せ。 ・旧安川邸でガイド内容を実践し、安川邸の担当者にアドバイスを受け修正を行ない、ガイド内容を作成。
・広報活動	市内 （学校・駅・商業施設等）	・作成したポスター、フライヤー配布 ＜主な配布先＞ ・ムーブ・小倉駅の観光案内所・カルチャータウン（黒崎イオン）・ユースステーション（黒崎駅）・カルチャーセンター（黒崎駅）・KGC（アウトレット）・北九州市立高等学校・北筑高等学校・日本語学校YMCA・西南女学院中学校高等学校・金田一丁目団地
・ボランティア	本学内 ZOOM使用	・英語学科を中心にボランティアを募集し、13名参加。 ・ガイド担当にはイベント前に説明会を実施。
・ゼミ打ち合わせ	本学内 ZOOM使用	・イベント全体の内容や、各箇所の現状報告。 ・旧安川邸、茶道部との打合せ結果報告。ゼミ内での問題解決。

・ イベント準備	本大学 旧安川邸	・ 茶道部室から道具の移動。 ・ イベント前日に旧安川邸での準備、練習。
・ イベント当日	旧安川邸	・ ボランティアへの説明と案内。 ・ 当日準備。イベント運営。片付け。

活動を振り返って

企画立案や広報活動、各関係者への対応全てを学生が行った。ガイド活動では旧安川邸の歴史ある建物の魅力子供から大人まで分かりやすく伝えられるように何度も視察を行い、修正と実践を繰り返した。お茶会については、本学の茶道部に協力を依頼し、日本の伝統文化や茶道の精神を英語に触れながら体験してもらうために何度も打合せと練習を行った。ほとんどの学生がイベント制作未経験者であるため、作業等の予測がみえず不安を抱えていた。一から企画を立て、実践することは容易な事ではないが、関係者の皆様のご協力と学生の努力により、どちらのイベントも満席が続き、様々な国、地域から140名もの方々がイベントに足を運んでくださり、多くの方に英語を通して安川邸と茶道の魅力を伝えることができた。

〈楽しかったこと〉（学生の声）

- ・ 茶道の勉強や当日のボランティアの皆様やお客様の楽しんで下さる姿をみられたことです。
- ・ イベントを通して茶道の奥深さや美しさを学ぶことで茶道の魅力を知ることができました。
- ・ 当日まで大変なことばかりでしたが、イベント当日に多くの人の笑顔や「楽しかった」「とてもいいイベントですね」といった感想を頂いてやりがいを感じました。

〈難しかったこと〉（学生の声）

イベントの責任者としてグループ活動においてのゼミ内のモチベーション管理、仕事の割振りなどや関係先との連携に難しさを感じました。モチベーションの高い人へ仕事が偏りがちになる為、ゼミ内で仕事が平等になるよう割り振り、メンバーへの説明などに苦慮しました。関係先との連絡内容をゼミ内へ分かりやすくまとめメンバーが共有できるようにし、ゼミ内で決定したことを関係先へ連絡する作業に多くの時間がかかり大変でした。

〈得たもの〉（学生の声）

トラブルなどもあり、メンバー全員とコミュニケーションをとることで相手の状況や考えを知ることがとても大切だと学びました。相手を決めつけずに知ろうとすること、自分の状況や考えも相手に伝えること、コミュニケーションを取ることがグループ活動を円滑に進める一番の鍵になるということを学びました。

今後の課題

ゼミメンバー全員で共通認識を持つ為に、進捗はその都度報告し確認を促す。疑問点をしっかりと解決することで不安要素を減らし、イベントの際に起こりうるイレギュラー案件などを事前に把握しておくことが必要である。また、メンバーのスケジュール管理を徹底し、できる限り対面で打合せを行いたい。

謝辞

イベントを開催させていただいた安川邸の皆様をはじめ、練習、茶道の作法や精神を細かくご指導頂きました茶道部の皆様、このプロジェクトに関わって頂いた皆様に感謝の意を申し上げます。

Photos



Tea Ceremony Preparation



Guided Tour



Tea Ceremony Room



Tea Ceremony

<https://www.seinan-jo.com/yaskawatei/>

<https://seinan-jo.com/english/2024/11/tea-and-tours-at-yaskawatei/>

1. 企画名 Sister Beach プロジェクト 2024

2. 企画代表者 西南女学院大学 人文学部観光文化学科 高橋幸夫

3. 参加者 観光文化学科4年 坂本采奈 小路麻央 福島直子 道城有紗 宮田らな 三好萌映
観光文化学科3年 入江和美 小山結衣 木村梨乃 實久穂乃 平田香帆 藤原姫華
山本美鈴

4. 概要

(1) 背景及び目的

「Sister Beach プロジェクト」とは、釜山(韓国) - 長井浜(行橋) - 宜蘭(台湾)の3都市の海岸域で交流協定を結ぶ、Sister Beach 構想をもとに長井浜公園及び、行橋市の活性化を目指すためのプロジェクトである。Sister Beach として互いに影響を与えながら、ビーチ及び周辺地域の知名度向上や観光資源の周知を目指すものである。

(2) 活動内容

ア. 行橋市活性化事業報告会

2024年2月19日に福岡県行橋市役所にて工藤政宏行橋市長に対して「Sister Beach プロジェクト」における台湾・韓国視察(2023年度実施)の活動内容の報告を行うとともに行橋市の観光の現状や課題を踏まえた将来構想について意見交換を行った。

イ. 行橋市椿市フィールドワーク

2024年5月26日～27日に行橋市椿市にてフィールドワークを行った。フィールドワーク内容は以下の通りである。

- ・「椿の里」椿市地域交流センターにて椿市の特産品を使用したお弁当を試食・評価
- ・現地住民の方と椿市の歴史的資源を視察
- ・2023年11月7日に福岡県行橋市長井浜公園内のビーチサイドリゾート「そらすな」に宿泊
- ・長井浜公園、「そらすな」についての学習
- ・行橋市役所商業観光課に対する「Sister Beach プロジェクト」についてのプレゼンテーションおよび今後の活動についての意見交換

ウ. 韓国(釜山)視察

2024年6月29～7月2日に韓国の釜山を視察した。視察内容は以下の通りである。

- ・RCEトンヨン、東義大学へ北九州市及び行橋市のモニターツアーの提案
- ・RCEトンヨン、東義大学学生と現地での交流
- ・RCEトンヨンやトンヨンの学生の活動及びRCEトンヨンについての学習
- ・Sister Beach 候補である釜山近郊ビーチ(鎮下海水浴場、広安里海水浴場)の視察



RCEトンヨン



鎮下海水浴場



東義大学

エ. 未来協創フォーラム活動成果報告会

2024年10月28日にコスメイト行橋にて開催された「未来協創フォーラム」に参加し、工藤政宏行橋市長へ「Sister Beach プロジェクト」の活動内容についてプレゼンテーションを行った。

オ. 行橋高校への出前授業

2024年12月9日に行橋高校で出前授業を行った。授業内容は、これまでの「Sister Beach プロジェクト」の活動内容の報告をした後、行橋市の魅力や課題についてグループワークやディスカッションを行った。

6. 成果

ア. 行橋市椿市フィールドワーク

行橋市椿市でのフィールドワークを通じて、農業体験などのイベントを継続的に行っていくことや、情報発信により力を入れていくことなどが課題として明確となった。

今後は、ブランド資源となりうる「椿市米」や平尾台を水源とした「椿市の水」などの認知度向上を図るとともに、自然資源を活用した体験型ツアーを企画し、椿市のさらなる発展を目指す。

イ. 韓国（釜山）視察

RCEトンヨン及び東義大学を訪問し、モニターツアーにおける課題点や改善点が明確になった。特に海外の学生が考える日本の魅力やツアーに求める要素を具体的に把握できたことは、今後の展開において重要な示唆となった。また釜山近郊のビーチ視察では、長井浜公園やビーチの発展に活かせる取り組み事例を得た。その事例を参考に、行橋高校と本学の高大連携を通じた地域活性化を進め、行橋市や長井浜公園のさらなる発展を目指す。

7. 活動を振り返って

今年度の活動を通じて、行橋市の活性化に向けた今後の展開をさらに広げるための基盤を築くことができた。また、現地視察先であるRCEトンヨンや東義大学では、結びつきを強めるためには交流が欠かせないことを実感した。本活動では、学生主体で企画・進行を一から行い、その過程で楽しさや達成感を感じるとともに、観光及びマーケティング分野における実践的な知識とビジネススキルを習得することができた。さらに昨年度の目標であったSister Beach構想を通じて言語や異文化の壁を越え、韓国との交流を深めることができた。今後も私たちが地域の「結び女(め)」となり、継続的な交流を促進し、さらなる関係構築を目指す。

8. 謝辞

本活動においてご支援・ご協力いただいております工藤政宏行橋市長、行橋市観光課の皆様、RCEトンヨンの皆様、東義大学キム教授及び学生皆様のお力添えにより海外交流を含む活動が実現できましたこと、また学生の成長につながっておりますことを心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

1. 企画名 北九州市の修学旅行誘致の取り組み
2. 主催者 北九州市観光課・合同会社チノアソビ
3. 企画者代表 西南女学院大学人文学部観光文化学科 劉明
4. 概要

(1) 経緯と目的

- ・北九州市の修学旅行は、市内宿泊を誘客した助成制度について、旅行事業者などからは一定の関心を得ていたものの、下記のa、b、cのように現状の助成制度を見直す必要があるという課題があがっている。
 - a. 修学旅行は、実施年度の助成制度(予算)が確定する前にあたる1、2年前に決まることが多く、旅行事業者にとってインセンティブとしての効果が薄い
 - b. 「北九州の修学旅行」の魅力に繋がりにくい(北九州を選ぶ決め手になりにくい)
 - c. 立ち寄り程度にとどまるなど消費金額が少ない
- ・北九州市観光課では修学旅行客誘致事業の一環とし、令和6年度より北九州市の強みを活かし、近年ニーズが高まっている、「SDG s」、「探究学習」どの要素を盛り込んだ新しいプログラムの企画開発を目的とした『SDGs修学旅行等の商品開発促進事業』をスタートしている。プログラムを実施するにあたり、並行して北九州市の魅力や「SDG s」の取り組みを訪問する学生に近い目線で発言し、探究学習などのサポートができる、大学生による修学旅行サポーターの育成および組織化(プログラム化)を行い、地域課題を解決したいと考えている。

(2) 実施日時・場所・参加人数

日程	時間	場所	活動内容	参加人数
2024年 10月15日(火) 16日(水)	12:40～17:30 9:00～11:30	下関市・門司港 小倉AIMビル	○長府・下関・門司港を巡り、歴史資源と観光ポテンシャルを比較し、観光政策の有効ポイントを学ぶ。 ○地域性や観光客数を比較し、結果の要因を分析した上で、ワークショップで課題を洗い出し解決策を出す。	・学生5名 ・和洋国府台女子高等学校 約200名 ・他大学生 約25名

5. 評価

・学生参加者の感想

- ◎ 今回の活動では、私たち大学生がファシリテーターとして参加し、千葉県から修学旅行で訪れた高校生をサポートした。高校生と共に地域活性化について深く考え、活動することができた。特に、まち歩きを通じて地域の歴史や文化に触れ、高校生の視点から提案された地域活性化の案には新しい発見が多くあり、地域に対する新たな視点を獲得の機会となった。高校生たちは、門司港と下関市を比較し、どのような課題が存在するのか、またその課題に対してどのような解決策が考えられるのかを深く考察し、具体的な案を提示していた。その姿勢から私たちも多くの学びを得ることができ、高校生の柔軟で創造的な発想に感銘を受けた。また、活動を通じて、地域の課題解決には高校生の新鮮な視点と行動力が重要であると改めて感じた。この2日間の活動は、私たち自身にとっても非常に貴重な経験であり、得られた知見や学びを今後の地域活性化活動に積極的に活かしていく所存である。
- ◎ 私たち学生が主体となって活動できたことは非常に良い経験となった。自分たちから積極的に意見交換を

行うことで、異なる観点からの意見を聞くことができ、それが新たな発見や学びに繋がった。また、グループディスカッションでは、これまで経験したことのない形式での実施であったため、当初は戸惑いも感じたが、雑談を交え、一緒にお菓子を食べたりすることで、リラックスした状態で全員が発言しやすい空間が作られることで、活発な意見交換が行われ、互いの考えを深める良い機会となった。さらに、こうした活動を通じて、主体的に動くことの重要性や、多様な意見を受け入れる姿勢の大切さを改めて実感した。この経験は、今後の活動や課題解決の場においても大いに活かせるものであり、自分自身の成長にも繋がる非常に貴重な機会であった。

- ◎ 私たち大学生と高校生という異なる世代が交流する中で、それぞれが異なる環境で生活しているからこそ生まれる着眼点の違いに気づき、新しい発見が多くあったことが非常に新鮮であった。特に、日常生活の中で当たり前だと思っていたことが、相手にとっては新鮮に映る場面が多くあり、そうした視点の違いが互いの学びに繋がった。また、高校生たちの柔軟な発想や積極的な意見に触れ、大学生である自分たちも多くの刺激を受けることができた。グループディスカッションでは、従来のような堅苦しい雰囲気ではなく、リラックスした環境を作ることで、互いの意見を気軽に共有することができ、多様な視点が交わることで議論がより深まり、有意義な時間となった。今回の活動を通じて、異なる世代が協力し合いながら課題に取り組む大切さを実感した。

6. 今後の課題

北九州市修学旅行誘致の取り組みではファシリテーターとして、高校生一人ひとりの意見を尊重し、意見を出しやすい環境を作ること意識した。グループ全員が積極的に意見を交わすことができていたが、難しい問いや複雑な問題になると、発言が少なくなってしまう場面があり、私たちファシリテーターが難しい問題に対する導き方やサポート力が不足していたと反省している。今後は、難しいテーマに対しても全員が意見を出しやすくなるような工夫を行いたい。例えば、問題をより小さく分けて考えさせたり、意見を引き出すために積極的に質問を投げかけたりすることが必要だと感じた。また、参加者全員がそれぞれの考えを言いやすい空気を作るため、より多くの練習と経験を積み、柔軟に対応できるようになることが今後の課題だと感じている。これらの反省を踏まえ、今後の活動においては、難しい問いに対しても参加者全員が意見を出し合えるような環境を提供し、より効果的なファシリテーションを行っていきたいと考えている。

7. 謝辞

今回の北九州市の修学旅行誘致の取り組みにお誘いいただいた北九州市観光課の方々、ご指導いただいた合同会社チノアソビの方々、また一緒に活動した他大学の学生の方々や北九州市に修学旅行に来てくださった和洋国府台女子高等学校の全ての皆様に対し、感謝の意を申し上げます。

8. 添付資料 【ゼミ生及び観光文化学科2年生がファシリテーターとして参加した様子】



1. 企画名 北九州魅力探究プログラム D0！起業学校

2. 主催者 第一ピアサービス株式会社

3. 企画者代表 西南女学院大学人文学部観光文化学科 劉明

4. 概要

(1) 活動の経緯と目的

北九州市役所 国際政策課を通じて以前から交流があった第一ピアサービス株式会社は、社会課題解決を目的とした事業開発支援を行っている。そこで、劉ゼミは第一ピアサービス株式会社と連携し、一昨年から北九州市の魅力を探究する活動として、「北九州SDGs魅力探究プログラムD0！起業学校」に参加している。この活動はふるさと・北九州市の交通×（スタートアップ・観光・まちづくり・地域産業など）について学び、郷土の魅力を知るとともに、産官学金メディア連携（北九州共創プラットフォーム）との多世代交流を通じたキャリア教育連携に取り組むことで、北九州地域を担う「未来創造人材」へ育成することを目的に開催されている。高校生・大学生・社会人といった幅広い世代が交流することで、新しい視点や多様なアイデアが集まり、それらのアイデアを基に北九州市が抱える人口減少や少子高齢化といった地域課題の解決に繋げていきたいと考えている。

(2) 実施日時・場所・参加人数

日程	場所	活動内容	参加人数
5月11日（土） 13:00～17:00	北九州SDGsステーション	・北九州の課題や現状から私たちに 何ができるのか企画を考える	学生2名
9月9日（月） 9:00～12:00	福岡県立小倉商業高校	・中間発表	学生2名

5. 評価

学生参加者の感想

◎今回の活動に参加し、高校生ならではの自由な発想や斬新な意見に驚かされることが多くあり、私たち自身も大きな学びが得られた。活動初日は、高校生とのコミュニケーションの取り方や、会話が上手く噛み合うかなど、不安があったが、高校生たちのフレンドリーで素直な対応に助けられ、楽しく活動を行うことができた。このプログラムの大きな目的のひとつは、北九州市の地域課題を発見し、その課題を解決するための企画を立案・実行することであるが、課題を見つけるプロセスでは、日常生活では気づきにくい視点を持つことが求められ、住み慣れた街の課題を再確認する良い機会にもなった。例えば、若者が遊べる場所が少ないことや、福岡市と比べて地域の魅力が薄いと感じる現状など、改めて地域の課題や背景について深く考えることができた。課題を解決する企画の立案においては、ハロウィンの時期に小倉駅周辺でパレードをするのはどうかなど、高校生ならではの柔軟な発想力が光る場面が多くあった。その他にも斬新なアイデアが次々と発表され、それらのアイデアをどのように実現可能な形にするかを共に考える時間は非常に刺激的であり、高校生のエネルギーや柔軟な考え方に学ぶ場面も多かった。一方で、やりたいことと実行可能なことをすり合わせる難しさも実感し、実行段階での調整の重要性も学ぶことができた。今回の活動を通じて、ただ地域課題を解決するだけでなく、高校生とともに地域の未来を考え、それを形にしていけるプロセスの大切さを学ぶことができた。今後も高校生が伸び伸びと活動できるよ

うサポートを続け、北九州市の魅力を若者ならではの視点で発信できるよう努めていきたい。

◎今回の活動では、高校生と社会や地域課題について「何が課題であるのか」「なぜそれが課題となっているのか」を考え、課題解決に向けた多様な意見や活動提案を行った。例えば、「北九州市にあったスペースワールドがなくなったため、遊園地を新たに作ることで北九州市をさらに賑わせることができるのではないか」という意見や、「小倉にあるカフェの認知度が低いことを改善するため、カフェを取材してSNSでその魅力を発信するべきである」という提案、さらに「小倉1日旅行マップを作成し、若者を呼び込むべきである」という意見など、ユニークで多岐にわたるアイデアが挙がった。高校生たちの柔軟な発想は、私たちには思いつかない新鮮なものであり、非常に参考になった。現実的に実行可能な提案もあれば、非現実的な提案もあり、課題解決に向けてそれを現実化することの困難さや難しさを、高校生だけでなく私たち自身も痛感した。また、現実的な活動内容であっても、多くの企業の協力が必要であったり、資金の調達が課題となったりするため、その実現への道のりは決して容易ではないと感じた。しかし、それらの課題にどのようにアプローチし、現実化に近づけていくかを考えることは私たち大学生の役割であるため、高校生たちを全力でサポートし、企業への取材に同行するなど、少しでも力になれたことは貴重な経験であった。現在も課題解決に向けた活動は続いており、高校生たちが挫けそうになった際には支えとなり、北九州市を活性化させるため、最後まで全力でサポートしていく所存である。

6. 今後の課題

今回の活動では、北九州の課題を見出すことができたものの、その課題に対して私たちが何ができるのか、どのように実行に移せるのかを具体的に考えることに多くの時間を要した。その結果、予定していた日程よりも活動が延長されることとなり、当初の計画に影響を与えることになってしまった。さらに、高校生とのスケジュール調整が難航し、一緒に活動する日が限られてしまったため、十分にコミュニケーションをとることができなかった。そのため、今後の課題としては、活動スケジュールの調整を柔軟に行い、事前に細かく計画を練っておくことが重要であると感じた。また高校生と密に連絡を取り合い、定期的にコミュニケーションを図ることを意識しながら、意見交換や共同作業をより積極的に行えるような体制づくりを目指して活動に取り組みたいと思う。

7. 謝辞

本活動をご支援・ご指導くださった、第一ピアサービス株式会社、福岡県立小倉商業高等学校、関わってくださった全ての皆様に対し、感謝の意を申し上げます。

・添付資料【活動の様子】



1. 企画名 コクラニキタイ

2. 主催者名 小倉北区役所 西南女学院大学

3. 企画代表者 西南女学院大学 人文学部観光文化学科 高橋幸夫

4. 参加者 観光文化学科 4 年 坂本采奈 小路麻央 福島直子 道城有紗 宮田らな 三好萌映
観光文化学科 3 年 藤原姫華

5. 概要

(1) 背景及び目的

「コクラニキタイ」は、10 代から 20 代に向けて、Instagram の運営やイベントの企画を通して、小倉の魅力を伝える産官学連携プロジェクトである。「コクラニキタイ」の「キタイ」には、「これからに期待する」、「実際に来た」、「また来たい」という3つの意味が込められており、「ヒトの魅力はマチの魅力」をテーマに活動中である。

進学や就職で多くの若者が北九州市から転出し、その中でも 20 代の転出が転入を上回る状態にある現在、私たちはその原因を、北九州市に住む若者が地元の魅力をキャッチする機会が少ないからではないかと考えた。そこで、女子大生の視点・感性・好奇心を活かし、小倉の魅力を発信することで、北九州市に住む Z 世代の市内への進学や就職への動機づけとなり、定着へ促すことを目指している。

(2) 活動内容

今年度は Instagram での情報発信をメインに活動した。以下では、今年度の投稿コンテンツを示す。

ア. 「小倉イルミネーション 2024」の広報活動

11 月 1 日(金)～1 月 13 日(月)まで小倉北区勝山公園周辺で開催された、小倉イルミネーションの広報活動を行った。本アカウントでは、イルミネーション点灯式のカウントダウンや、コクライルミネーションを紹介する投稿を作成した。実際に現地に赴き、イルミネーションの見どころや、女子大生視点でのおすすめフォトスポットを取り上げ、Z 世代に響くコンテンツ発信に力を入れた。

イ. 『パルクール世界選手権 in 北九州』の広報協力

11 月 15 日(金)～17 日(日)に小倉北区で実施された「パルクール世界選手権 in 北九州」及び、選手権に伴うイベントの広報を行った。本活動のテーマである「ヒトの魅力はマチの魅力」を発信するために、「若者のチャレンジ」に着目し、本イベントに出演する東筑紫学園高等学校の生徒へ密着取材を実施した。



東筑紫学園高等学校への取材

ウ. 「北九州ポップカルチャーフェスティバル 2024」のボランティア活動

11 月 30 日(土)～12 月 1 日(日)に西日本総合展示場 新館で実施された「北九州ポップカルチャーフェスティバル 2024」のボランティア活動に参加した。当日は北九州市役所が担当する「大塚製薬株式会社」と「レンタルコスチュームみやび」のブースの補助や、来場者アンケートの実施、本アカウントのストーリー機能で当日の様子やイベントのタイムテーブルのお知らせなどを行った。

エ. 「つなぐヒカリプロジェクト」の宣伝

12月14日(土)に北九州モノレール車内で実施された「つなぐヒカリプロジェクト」の宣伝を行った。本アカウントでは、小倉商業高校との出前授業の様子や事前準備から当日のイベントの様子まで、幅広く取り上げ発信した。また、ストーリー機能を用いてイベントの予約フォームの案内も取り入れ、積極的な告知を行った。

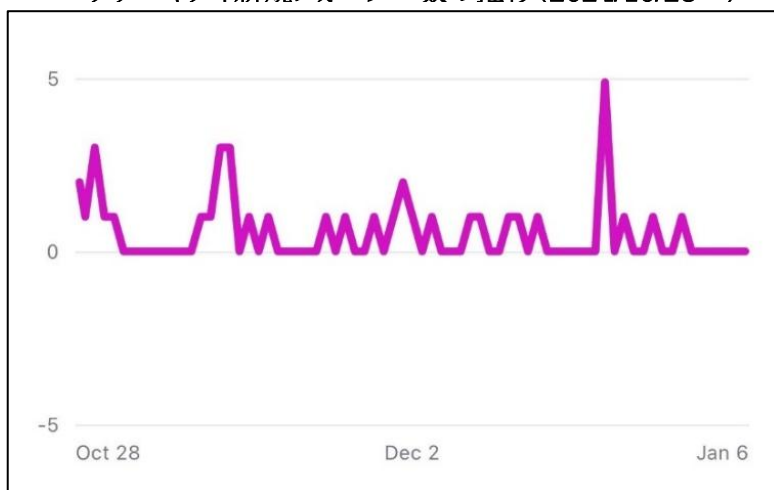
小倉イルミネーション投稿



6. 成果

以下のグラフは、2024年10月28日(月)から現在までの、新規フォロワー数の推移を示したグラフである。活動を再開してから約3か月でフォロワー数は38人増加した。

コクラニキタイ新規フォロワー数の推移(2024/10/28～)



7. まとめ

今年度の活動を終えて、「コクラニキタイ」の新体制に向けて体制を整えることができた。また、行政職員や地元企業、高校生と関わることで、地域が一体となって地域の活性化を行うことができ、地域の課題解決を熟考する大変貴重な機会となった。学生主体の本活動では企画・投稿作成を一から行い、楽しさ・達成感を大いに感じながら、地域活性化及び観光マーケティングを学ぶ学生として必要な視点・ビジネススキルを培うことができた。今年度の活動の課題として、地域内外を対象としたさらなるフォロワーの獲得と、安定したコンテンツ提供、アドバイザーの獲得が挙げられる。今後も「コクラニキタイ」の活動を通して、「ヒトの魅力はマチの魅力」をテーマに女子大生の持ち味を存分に活かしながら、地域が一体となる取り組みを目指す。

8. 謝辞

本活動を終始温かく見守ってくださった、小倉北区役所総務企画課の担当者さま及び活動にご協力いただいた全ての皆さまに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

1. 企画名 つなぐヒカリプロジェクト
2. 主催者名 北九州高速鉄道株式会社
3. 企画代表者 西南女学院大学 人文学部 観光文化学科 高橋幸夫
4. 参加者 観光文化学科4年 小路麻央 田所紗佳 坂本采奈 福島直子
道城有紗 宮田らな 三好萌映
観光文化学科3年 入江和美 小山結衣 平田香帆 藤原姫華

5. 概要

(1) 背景及び目的

福岡県立小倉商業高等学校と西南女学院大学観光文化学科による共同プロジェクト。コロナ禍で学生生活を制限された高校生と大学生が共同し、地域活性化に貢献したいという想いから始まった活動である。

(2) コンセプト

コロナ禍で生活を制限された人々をターゲットにし、「明るい未来をヒカリでつなごう」というコンセプトをプロジェクトの軸として活動している。未来には「地元の未来」と「私たち一人一人の未来」、ヒカリには「イルミネーションの灯り」と「若い世代のエネルギー」という気持ちが込められている。また「人と時間と空間(場)をつなぐ、ひとつのストーリー性」を創りあげてことを意識して活動している。

3回目の実施となる2024年度は「えもえモノレール」をコンセプトとした。Z世代の「エモい」と「かわいい」を表現した装飾を車内に施した。

(3) 活動内容

福岡県立小倉商業高等学校生と西南女学院大学生が北九州高速鉄道株式会社(北九州モノレール)様、小倉北区役所様ご協力のもと、特別装飾列車のプロデュースを行った。

実施日	2024年12月14日(土)
実施場所	展示:小倉駅 運行:小倉駅～企救丘駅～小倉駅
参加生徒数	23名(当日欠席含む)
参加学生数	11名
一般参加者数	56名



高校生・大学生集合写真
えもkawaii♡ラブリー車両にて



事前告知ポスター

それぞれ車両ごとにテーマカラーを決め、コンセプトを定めた4両編成のモノレールを特別列車としてプロデュースし、“一日限りの特別列車”を運行した。

○1車両目のテーマカラーは「紫」とし、コンセプトを、ミステリアスな雰囲気
の「走る占い家車両」とした。城野で当たると噂の占い家様にご協力いた
だき、1人一件分ずつ占える車両とした。(図1)



図1

○2、3車両目のテーマカラーは「ピンク」とし、Z世代のトレンドを取り入れ、かわいいを表現した「えもkawaii♡ラブリー車両」をコンセプトとした。POLA THE BEAUTY 小倉駅前店様、Be-STAFF MAKE-UP UNIVERSAL 北九州校様にご協力いただき、肌診断やメイク・ヘアアレンジが体験できる車両とした。(図2, 3)



図 2



図 3

○4車両目のテーマカラーは「白」とし、クリスマスらしさを演出した「心も体も温まるカフェ車両」をコンセプトとした。株式会社辻利茶舗様にご協力いただき、黒麦焙・八女玉露どらやき・八女の雫(饅頭)を提供・販売した。(図4)



図 4

○運行前には小倉駅で車両展示を行い、列車の発車待ちの人々等、多くの人々に見ていただくことができた。運行中には、ビンゴ大会を開催し、ご協力いただいた企業の商品をはじめとする豪華な景品を用意した。企救丘駅では、ビンゴ大会の景品を2名のサンタよりお渡しした。またクリスマスツリーの飾り付けを行い、匿名の手紙交換「手紙オクリマス」も行った。参加者が飾り付けたクリスマスツリーは、翌週21日より25日までの5日間、小倉駅ステーションピアノ横に展示を行った。(図5, 6)



図 5



図 6

6. 活動を通しての学び(活動を振り返って)

- ・イベントを企画し実施するまでに、当日までのスケジュールを細かく立て、行動していくことの大変さおよび他者の協力の大切さを学んだ。
- ・イベントを成功させるためのチーム連携と参加者の立場となり、物事を考える大切さを学んだ。
- ・今年度はターゲットを特定の世代に絞ったため、昨年度と比較して参加者が少なかった。そのためメインターゲットとは別にサブターゲットも考慮し、多様な層にアプローチすることが必要であると学んだ。
- ・展示にお越しくくださった方から、イベント情報を初めて見たとの意見があり、SNS告知以外にプロモーションの範囲を広げる必要があると学んだ。
- ・様々な企業に打診するにあたって、情熱を企業に伝えることが信頼へとつながると学んだ。

7. 謝辞

本活動においてご支援・ご指導をいただいております北九州高速鉄道株式会社様、小倉北区役所様、ご協力いただきました株式会社辻利茶舗様、POLA THE BEAUTY 小倉駅前店様、Be-STAFF MAKE-UP UNIVERSAL 北九州校様、占い家様、株式会社JR小倉シティ様、西日本旅客鉄道株式会社様、暖かく活動を見守ってくださった地域住民の皆さまのお力添えにより活動が実現できましたこと、また参加生徒・学生の成長につながっておりますことを心より御礼申し上げます。

1. 企画名 福岡県赤村 源じいの森のキャンプ企画
2. 主催者名 源じいの森
協力 日本航空株式会社、赤村、西南女学院大学
3. 企画代表者 西南女学院大学 人文学部観光文化学科 高橋幸夫
4. 参加者 観光文化学科3年 小山結衣 山本美鈴

5. 概要

(1) 背景及び目的

本活動は「源じいの森」の「手ぶらでキャンプ体験プラン」の魅力を発信するため、ソロでも友人同士でも快適に過ごせる新たなプランの企画をJALふるさとアンバサダー(※)と女子大学生の視点で考案するものである。作成したプランは実際に体験し、その様子をSNSで発信することで、「源じいの森」の手ぶらでキャンプ体験プランや女子旅キャンプの魅力をより広く周知させることを目的としたものである。

((※) ゆかりの地域に移住して地域活性化活動を行う客室乗務員)

(2) コンセプト

「癒し・安全・食」

都市部に住むキャンプ未経験の方、非日常を味わいたい方をターゲットに、女性や子ども連れが安心して参加できるプランを企画する。

(3) 活動内容

ア. 定例会議

キャンププランの体験までに2回の会議、体験後に1回の会議を実施した。

1回目(10/28)：本活動メンバーの皆様との顔合わせ及びプラン大枠の共有・意見出し

2回目(11/18)：プランのより詳細な部分の決定(例:写真スポット選定、体験プラン)

3回目(1/6)： 体験プランを振り返りながら実現可能性や改良点についての意見共有
販売プランの最終決定

イ. 企画体験

2024年12月1日～2日に販売を見据えたキャンププランを実施した。テントの設営から赤村の食材を使用した食事、宿泊、後片付けまで販売プランの内容の全てを体験し、プランの魅力や改善点を検討した。



←写真スポットの選定

キャンプ場で写真を撮って過ごすことは、ハンモック体験やモーニングストレッチなど、フリータイムの過ごし方のひとつである。「源じいの森」の魅力が伝わる全3ヶ所を選定した。



←テント周辺の装飾

ブッシュクラフトエリアに竹灯りを設置し、テントをLEDライトで装飾。従来のテントサイトイメージを一新し、温かみのある空間を演出した。今後も竹灯りの設置を継続して行う予定である。

6. 成果

ア. 定例会議

- ・手作りの竹灯籠をブッシュクラフトエリアに設置する案の採用、設置の継続
- ・赤村の食材を使ったメニューの考案及びメニューとして販売
- ・女性の安全面により考慮した設備環境の再考

イ. 企画体験

- ・年間を通じて楽しめるフォトスポットの選定
- ・企画の実現可能性や課題点を明らかにした

7. 活動を振り返って

販売を見据えたプランの企画を考えるにあたって、JALふるさとアンバサダーや女子大学生ならではの視点で意見出しを行った。特に写真スポットの選定や食事、一部エリアの装飾などでは女子大学生ならではの感性や情報を活かすことができた。また、実際に体験することで、企画段階では気づかなかった課題点や改善点が見つかり、参加者の視点や体験することが重要であることを再確認できた。

会議では自身の意見を求められる場面も多く、発言を通して自身の考えが採用される喜びを感じるとともに、他者の意見を取り入れることでより優れたアイデアが生まれることを実感した。また、常に自らの意見を持ち、考え続ける重要性を学んだ。

8. 謝辞

本活動にお声掛けいただいた源じいの森の皆様、日本航空株式会社の皆様、そして赤村の皆様に心より感謝申し上げます。

本活動を通じて、貴重な経験と学びを得ることができ、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。皆様と共に過ごした時間は大変かけがえのない経験となりました。これもひとえに、皆様のご協力とご尽力によるものであり、改めて深く感謝申し上げます。



↑源じいの森にて
活動に参加された皆様との集合写真



↑JALふるさとアンバサダー吉田様との写真

1. 企画名 福岡県みやこ町・第一ピアサービス株式会社・ 西南女学院大学の三者連携活動の取り組み

2. 主催者 みやこ町

3. 企画者代表 西南女学院大学人文学部観光文化学科 劉明

4. 概要

(1) 活動の経緯と目的

北九州の地域課題解決を図り、北九州地域を担う人材へと成長することを目的に、これまで北九州魅力探究プログラム「アオハルし放題」や「D0！起業学校」といった活動を行ってきた。そして、これらの活動の経験を踏まえ、令和6年度も地域課題解決のために第一ピアサービス株式会社と共に何かできないかと考えていたところ、現在、人口減少・少子高齢化・公共施設の老朽化などの課題を抱えているみやこ町のお話をいただき、三者連携する運びとなった。福岡県みやこ町・第一ピアサービス株式会社・西南女学院大学が相互に協力することにより、みやこ町の社会地域課題の解決を図り、産学官連携（横連携）と多世代交流（縦連携）を通じたキャリア教育連携（縦横連携）に取り組むことで、魅力と活力ある地域づくりに寄与することを目的としている。

(2) 実施日時・場所・参加人数

日程	場所	活動内容	参加人数
8月21日（水） 10：00～18：00	みやこ町地域	・綾塚古墳や歴史民俗博物館といったみやこ町にある観光スポットを訪れ、みやこ町の観光資源や魅力を知る。	学生17名
12月17日（火） 16：20～17：50	西南女学院大学	・みやこ町の課題を観光と交通の視点から考える。	学生9名
12月19日（木） 11：00～18：00	みやこ町地域	・みやこ町を散策し、PR動画を撮影する。	学生9名

5. 評価

・学生参加者の感想

◎この三者連携活動の取り組みは、令和6年4月頃に第一ピアサービス株式会社から、みやこ町についてのお話をいただいたことがきっかけで、7月には九州地方の町村レベルで初めてとなる産学官地域連携協定を締結する運びとなった。協定を締結するにあたり、協定内容の策定や具体的な活動計画の立案など、一からプロジェクトを立ち上げる過程で大変な面も多くあったが、第一ピアサービス株式会社、みやこ町、本学の三者それぞれが持つノウハウや知識を共有し、連携を重ねて取り組んだことで、無事に協定を結ぶことができ、大きな達成感を得ることができた。私自身、みやこ町を訪れるのは初めてであったが、フィールドワークを通じて、みやこ町の自然の豊かさや、美味しいグルメ、隠れた映えスポットなど、訪れるたびに新たな魅力を発見することができ、また地域の方々との交流を通じて、みやこ町の人々の温かさにも触れることができ、みやこ町の魅力をさらに発信し、より多くの人に知ってもらいたいと強く感じた。今後は、みやこ町でのフィールドワー

クを継続し、みやこ町にあるお店や施設の魅力を発見・発信していくことはもちろん、ツアーの企画や「みやこ町グッズ」の企画・製作など新たな取り組みにも挑戦し、みやこ町のさらなる活性化に貢献できるよう努めていきたい。また、この活動を通じて私たち自身も成長し、活動の幅を広げていきたいと思う。

◎この活動を通して、初めてみやこ町を訪れた。初めて訪れた時は自然が豊かだという印象が強かったが、町の説明やツアーをしていくうちにたくさん魅力があることが分かった。1番印象的だったことは、人の温かさである。役場やお店の方々と実際に関わることによって、みやこ町の知識が深まるだけでなく、丁寧な接客や会話から、また訪れたいという気持ちが芽生えた。また、町の人たちのみやこ町に対する温かく熱い想いを肌で感じ、地域活性化に貢献したいという気持ちが大きくなった。他には、自然が活かされた施設も印象的であり、自然に囲まれながら、デザートが食べられる場所や、キャンプ場、ダムなど空気がおいしくて居心地がよく、また訪れたいと思える場所ばかりであった。このような魅力溢れるみやこ町を、今後大学生ならではの視点で様々な提案や活動を積極的に行っていく、より多くの人に知ってもらおうお手伝いをしたいと思う。

6. 今後の課題

みやこ町でフィールドワークを2回実施したが、まだ訪れたことのないお店や観光スポットも多くあるため、今後の活動で、これまで足を運んでいない場所にも訪れ、みやこ町の新たな魅力をさらに発掘していきたいと思う。また、フィールドワークだけにとどまらず、若い世代にも興味を持ってもらえるようなツアーを企画したり、町の魅力を発信するための「PRグッズ」を製作したりするなど、様々な取り組みに挑戦し、多方面からみやこ町の魅力を伝えることで、町全体の活性化に貢献できるよう努めていきたい。これらの取り組み以外にもみやこ町のことをより多くの人に知ってもらうためには、広報活動にも力を入れる必要があると考える。そのため町の公式InstagramなどのSNSを有効活用し、そこに私たち学生が作成したまちPR動画などを投稿するなどして、情報発信を積極的に行っていきたいと思う。

7. 謝辞

今回の三者連携活動の取り組みをご提案していただいた第一ピアサービス株式会社、フィールドワークツアーの企画・運営をしていただいたみやこ町役場の方々、私たち学生を温かく迎え入れてくださったみやこ町住民の方々、参加してくださった先生や学生全ての皆様に対し、感謝の意を申し上げます。

・添付資料 【フィールドワークツアーの様子】



トピックス

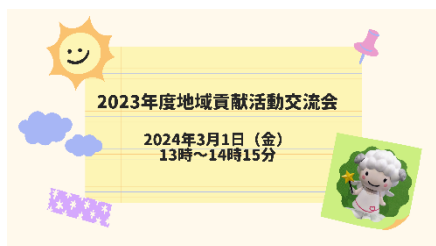


① 地域貢献活動交流会を開催

2024年3月1日（金）に2023年度の地域貢献活動交流会を開催しました。2023年度、地域連携室に活動申請を行った10団体がポスターセッション形式で発表を行いました。この交流会は、学生たちが自身の活動を振り返り、その学びを参加者の方々と共有する貴重な機会となっています。当日は、学生や教職員の他に、地域の関係者や企業等も参加し、活発な質疑応答が行われました。

なお、2024年度の地域貢献活動交流会は、2025年3月6日（金）に予定しています。

（報告：地域連携室）



② ギラヴァンツ北九州「防災」イベントに参加

2024年9月7日（日）に開催された「東京海上日動Presents ギラ☆ランド de あそぼうさい 〜ギラヴァンツ北九州『防災』イベント〜」に看護学科の4年生8名が参加しました。今回は、心肺蘇生法（CPR）の中でも胸骨圧迫の方法とAEDの使い方を体験できるブースを出展しました。猛暑のなかでしたが、学生たちは様々な年代の参加者と積極的にコミュニケーションをとり、BLS（一次救命処置）研修で身につけた知識や技術を発揮していました。ゲーム感覚で楽しみながら体験できるように工夫したため、大人だけでなく、多くの小学生も参加してくれました。

（報告：看護学科 中原智美）



③ シニアサマーカレッジを開催

2024年7月～9月にシニアサマーカレッジを開催しました。シニアサマーカレッジは毎年夏に北九州市年長者研修大学校 周望学舎と連携し、本学内で行っているシニア世代向けの公開講座です。今年度は「向上の夏・西南の夏」と題し、合計15講座を開講。本学教員による様々な分野の講義や、学生との交流、社会見学を行いました。

受講生からは、「有意義な夏となった」「新しい知識が増えて良い刺激になった」といった声が聞かれ、とても好評でした。なお、2025年度の夏も開催予定です。

(報告：庶務課 山戸友美)



④ JAL との連携による廃食油の回収

2024年10月26日(土)、27日(日)に開催された第66回しおん祭で、JAL との連携により家庭等から出る廃食油の回収の取り組みを実施し、2日間で約150リットルの廃食油を回収することができました。

JAL は、「すてる油で空を飛ぼう」プロジェクトと題し、未活用資源である家庭から出る廃食油(植物由来のもの)を回収し、廃食油を原料とした国産 SAF(持続可能な航空燃料)を製造する取り組みを行っています。この度、九州エリアで初の産学連携による取り組みとなりましたが、都内のイベントに匹敵する回収量となり、多くの皆様方のご協力により、大成功で終えることができました。

今後は、廃食油の回収と国産 SAF の製造を行う株式会社レボインターナショナルと連携して、各家庭や本学栄養学科の調理実習で使用した廃食油を継続的に回収し、未来の航空燃料を製造する取り組みに協力することで、CO2 排出量の削減(脱炭素化社会の構築や持続可能な社会の構築、地球温暖化防止)に貢献していきます。

(報告：学生課 築別ゆりか)



⑤ 北九州エコライフステージに参加

英語学科の学生がメンバーとなっているゴールデンZクラブ（女性の地位向上についての活動や国際ボランティアを行っている北九州ゾンタクラブ傘下の学生組織）は、2024年11月16日（土）、17日（日）に開催された西日本最大級の環境系のイベントであるエコライフステージに参加しました。当日は、カンボジア学習支援や女性に対する暴力撲滅デー等の活動を紹介し、また市内の老舗ケーキ店に作っていただいたカンボジア産・黒胡椒を使用したクッキーの販売も行いました。その利益はカンボジアの学校に寄付する図書の購入費に充てられました。

（報告：英語学科 ゴールデンZクラブ）



⑥ 北九州市Z世代課パートナーズの交流会に参加

2024年11月23日（土）、Z世代課パートナーズの交流会に参加しました。Z世代課パートナーズとは、北九州市に委嘱された「北九州を盛り上げたい、何か役に立ちたい」と思う若者の集まりで、15歳～29歳（1995(平成7)年4月2日から2009(平成21)年4月1日までに生まれた者）で構成されています。私も北九州に良い未来を残したいという思いからZ世代課パートナーズに応募



し、2024年7月より委嘱されています。今回の交流会の参加者は22名。

全体での自己紹介の後、3つのグループに分かれ、さまざまな問題の解決策を話し合い、交流を深めました。自己紹介の際には武内市長も参加され、参加者1人1人にコメントをいただきました。

今後は、Z世代である本学の学生とZ世代課をつないでいきたいと思います。

（報告：入試課 上中野雅人）

⑦ 「ちゃれんじ」の学生ボランティア活動レポートが「優秀レポート」に採択

一般財団法人学生サポートセンターは、「自由な発想と行動力」によって社会貢献活動を行っている学生ボランティア団体を対象に「学生ボランティア団体活動レポート」を募集し、ボランティア活動の意義や必要性の情報発信につなげるとともに、ボランティア活動の内容を工夫しながら社会貢献を計画・実行している学生ボランティア団体を支援しています。

この度、西南女学院大学ボランティアグループ「ちゃれんじ」が活動レ



ポートを応募し、見事「優秀レポート」に採択されました。学生サポートセンターからの活動助成金を活用し、今後も更なる活動の充実・発展のために取り組んでいきます。

(報告：学生課 築別ゆりか)



⑧ 松本清張誕生祭で発表

2024年12月21日(土)に、観光文化学科角谷ゼミの3年生7人は、松本清張記念館で開催された「松本清張生誕祭」に参加し、「松本清張と市の発展」について発表しました。この発表は、昨年夏に韓国・慶尚南道南海郡で開催された「2024 グローカル観光国際学術大会」において、館長の古賀厚志様や友の会会長の加島巧様をはじめとするスタッフの皆様の指導を受けて作成した研究が、最優秀賞を受賞したことがきっかけで実現しました。

今回の発表では、幅広い世代の皆様に関わりやすく伝えることを目指し、表現や滑舌に特に注意して準備を進めました。その結果、松本清張氏のご家族や館長・スタッフ、友の会会員の方々に高く評価されました。また、友の会会長の加島巧様の講演を通じ、松本清張氏の作品が多く的人物や社会とどのように関わっているのかを深く学ぶ機会を得ました。この経験により、改めて松本清張氏の偉大さに感銘を受け、研究にさらなる深みを加えることができました。

(報告：ゼミ長 岩下奈央)



⑨ 北九州の食文化 伝統的発酵食品「ぬか炊き」の継承活動

北九州市は、「文化庁100年フード」に認定された江戸時代から続く発酵食品「糠床・糠炊」の調査研究や保護継承を推進し、その魅力を発信しています。中でも、100年続く「ぬか炊き」食文化の継承を目的とした取り組みの1つとして、本学栄養学科1年生を対象に「ぬか炊き調理実習」を行い、北九州小倉・糠床糠炊き研究会の会長直々に、「ぬか炊き」の魅力やその作り方を伝授してもらいました。

さらに、ここで学んだ学生の数々が「次世代のぬか炊き食文化の継承者」となり、小学校の「ぬか炊き調理実習」のサポーターとして活躍しました。ほとんどの子供が知らない糠床・糠炊きについて、知ってもらいよい機会となりました。このような小さな活動の積み重ねによって、次世代へ「ぬか炊き」食文化の継承がなされています。

(報告：栄養学科 木村宏和、山田志麻)



⑩ 「かなめキッズひろば」の提供

本学では、子育て支援の一環として北九州市が実施しているシン・子育てファミリー・サポート事業において、子どもたちが過ごせる場所（かなめキッズひろば）を提供することになりました。

かなめキッズひろばには、乳幼児ルームと学童ルームがあります。乳幼児ルームには、子どもたちが楽しくゆったりと過ごせるようにカプラやブロック、型はめなどの玩具、ベビーベッドを置いています。学童ルームは宿題ができるように学習スペースを準備しました。

10月から開始し、少しずつではありますが 利用いただいています。

（報告：保育科 阿南寿美子）



⑪ 北九州市 「おいしい給食大作戦 学校給食応援団」に参加

北九州市は、令和6年度から学校給食応援団を発足、和洋中の料理人や市内栄養士養成大学とコラボした献立を作成することになりました。

本学は、栄養学科4年生（永田、船越、天本ゼミ）14名が宇佐美商店様とコラボし、「ぬかみそ」を使用した献立をテーマに企画考案した「さばのダブルみそ揚げ」が、2025年1月24日、27日に北九州市立の小中学校給食として提供されました。また、1月24日に城野小学校での学校給食交流会に4年生4名がサバのダブル味噌揚げができるまでのプレゼンを実施し、その後一緒に給食を頂きました。多くの子供たちから、「サバのダブル味噌揚げがとても美味しい、ご飯がすすむ」「私は魚が大嫌いだけど、これは食べることが出来る。」と感想を頂き、大好評でした。

（報告：栄養学科 天本理恵）

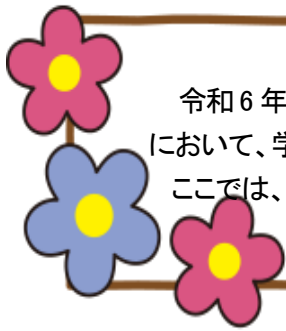


永田ゼミ、船越ゼミ、天本ゼミの総勢14名のチーム+宇佐美さんからのアドバイスで考案しました。



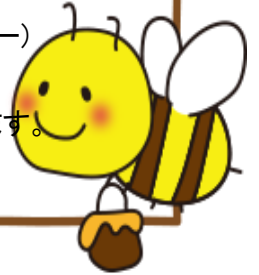
2025年1月24日学校給食交流会に参加してきました。（城野小学校）

学生ボランティア団体「ちゃれんじ」活動レポート



令和6年度「学生ボランティア団体助成事業」(主催:一般社団法人 学生サポートセンター)において、学内で活動する「ちゃれんじ」が助成対象の団体として選ばれました。

ここでは、その際に提出した大住千穂(福祉学科3年生)さんの活動レポートをご紹介します。



自分自身が楽しんでボランティア活動に参加すること

活動団体: ちゃれんじ

私たち西南女学院大学「ちゃれんじ」は、障害児とそのきょうだいの余暇活動支援を行う団体である。レクリエーションや遊びを通して、体を動かすことの楽しさを伝えること、肥満予防など健康・体力の維持・増進のために子どものころから運動習慣を身に付けること、保護者同士の交流の場を提供することを活動の主な目的としている。障害児についての障害特性を理解し、障害児だけでなく、そのきょうだい「きょうだい児」と呼ばれる子どもの余暇活動を支援することにも重きを置き、2004年から活動を続けている。

このボランティア活動に参加している学生のほとんどが、保健福祉学部にて在籍しており、看護師や社会福祉士、養護教諭、保育士など、将来人を支援する職業に就きたいと考えている。学生ひとりひとりが、活動の中で支援者としての在り方を学んでいる。

ちゃれんじの大きな特徴は、企画・運営、その後の反省会までを全て学生主体で活動しているところだ。特に、活動後の全体振り返りには力を入れている。ちゃれんじの活動に参加してくれている子どもは、活動に継続して参加している子どもも多い。学生は、顔写真付きの個人データに、毎回担当した子どもについて気づいたことを書き足し、全体で共有する。次の活動が始まる前に、子どもの性格や障害の特性をそのデータから情報収集することができる。そのような個人記録があることで、担当する子どもが変わっても次回の活動時、学生と子どもの間にできた信頼関係を壊すことなく、長く子どもが活動に参加しやすい環境を作っている。また、活動は企画ごとにリーダーを決め、学生全員が企画、準備、運営に携わっている。活動内容は、季節感を感じられること、体を動かすものと芸術に触れるものどちらの活動も偏りなく行うこと、その子自身のストレングス(本来その人が持っている強み)を引き出すことを意識している。他にも、活動中は子ども1人に対し、学生1～2人の体制で活動することを基本にしており、子どもが担当の学生に精一杯甘えられる体制を作っている。

ちゃれんじの活動は、先述したように障害児だけでなく、障害児のきょうだい「きょうだい児」の余暇活動も支援している。障害がある子どものきょうだい児は、障害児であるきょうだいを見て育ち、周囲の大人の真似をしながら支援者として成長している子どももいると私たちは考える。このことに私たちは着目し、障害児もきょうだい児も楽しむことができるプログラムを作成し活動を行っている。よって、障害児だけに学生が付くのではなく、きょうだい児にも担当の学生が1人付き、障害児と同じように学生に甘えられる環境を作っている。障害児は自由に遊べる環境を、そして、きょうだい児にはきょうだいの心配をせず、自分自身がしたい遊びを自由に行うことができる環境を提供するために私たちは活動している。

さらに、活動は参加者の保護者からも好評だ。日頃から一生懸命育児を行う保護者が、ちゃれんじの間だけでも子どもと距離を置き、自分自身の時間を過ごすため、そして、保護者同士で情報共有を行い、保護者同士の居場所を作るためにもちゃれんじというボランティア活動の意義があると考え。短い時間ではあるが、「自分は一人ではない」という気持ちを保護者が感じてくれたらと思っている。障害がある子

どもを持つ親からは、「聴覚障害があるので目が離せないし、周囲の目も気になってしまう」、「多動症なので急にかけ出したり、他の子どもをケガさせないか不安」と言った声が聞かれる。本来、障害があることにより、活動が制限されることはあつてはならない。しかし、障害があることにより、思う存分身体を動かすことができない子どももいる。そのため、子どもたちに運動、芸術に触れ合う機会を設け、子どもたちが思う存分楽しめる環境づくりを行っている。保護者から人気の活動は、公共交通機関を使ってのお出かけである。障害児を連れてのお出かけは、体力も多く使うそうで、普段中々、公共交通機関を使って出かけることは難しいと聞いている。そのため、子どもが電車やバスに乗る機会があるお出かけ企画は、子ども自身はもちろんだが、保護者にも喜ばれている。

活動の反省点は、学生がゆえに障害特性の知識が不十分であるということだ。誰一人として同じ人間がいないように、同じ障害を持っても子どもの障害特性や性格はそれぞれ全く異なる。障害特性や障害児について、普段から机上で学んでいる学生が多いにも関わらず、実際に子どもと触れ合ってみないと分からないことは多くある。学生1～2人で子どもを見守る為、安全性の面を気かけすぎ、つい「ここは走らないで、そっちに行つてはだめです。」と声をかけている学生が多い。制限をかけることは、子どもの安全性を確保するために必要不可欠であるが、制限をかけ過ぎることは、「障害児やそのきょうだいの遊びの場を提供する」ちゃれんじの本来の目的から遠ざかってしまう。「だめ」といった否定的な表現を使うのではなく、違う選択肢を準備し子ども自身が選択できるようにする必要があると感じる。また、ちゃれんじに参加する子どもの年齢層は、6歳から15歳と幅が広い。ため様々な年齢層の子どもが、飽きず、楽しく活動できるプログラムを提供していくことも求められていると思う。活動後の振り返りで見つかる反省点を改善しながら、子ども自身が「また活動に参加したい」と思ってもらえるようにこれからも活動を続けていきたい。

ボランティア活動を通し多くの力を得ることができた。誰かに頼まれてボランティア活動をするのではなく、自主的に活動するからこそ、そこで得た学びを十分に吸収できると私は考える。自分視点ではなく、子どもの表情や仕草、些細なことに気を配り、その状況を考えられるようになったのは、このボランティア活動から得ることができた力である。「誰かのために活動する」という目的をもってボランティア活動に参加することももちろん大切であるが、誰かのためにという目的だけではなく、「自分自身が楽しんでボランティア活動に参加すること」がとても重要なことだと考える。毎日生活し続ける中で気づくことができなかった、物事の見方や価値観を広げるためにはボランティア活動は必要な活動であると考え。「あんなことができるんだ」と保護者がこれまで気づくことが無かった子どものストレングスを学生が引き出し、子どもの笑顔を見ることができたときはとても嬉しく、またやりがいを感じる。こういった経験は、自分から動いて活動に参加しなければ得ることができない。普段、普通に生活していたらめぐり合うことが無かったかもしれない人とのつながりを感じられ、自らの成長も感じられるボランティア活動はとても魅力的だ。私たちはこの魅力を感じながら、これからも子どもたちの明るい笑顔と共に学生全員で楽しみ、ちゃれんじの活動を続けていきたい。

2024 年度 地域連携室の取り組み

【おはなしづくりワークショップ】

1. 絵本作家はしもとえつよ氏による「おはなしづくりワークショップ」

2. 企画者 子ども・子育てワーキンググループ：

保育科 阿南寿美子（企画代表者）、栄養学科：天本理恵

3. 概要

（１）目的

本学の認定絵本士養成講座もご担当くださっているはしもと先生に、おはなしづくりのコツについて教えていただき、身近にあるおはなしの「もと」からイメージを膨らませ、おはなしづくりを体験することを目的とする。

【企画趣旨】

絵本をはじめとしたおはなしに親しむことは想像力や言葉の発達以外にも心の安定や他者とのコミュニケーションなど子どもの育ちに大きく関わっている。保育者を養成する保育科では認定絵本士を養成しており、養成講座の一つに「絵本作家の思いを知る」がある。この講座では、学生たちが一つとして同じものがない自分だけのストーリーを創り出している。この活動を保育現場の方をはじめ、子どもと関わる多くの方に体験していただきたいと考え、本企画を実施した。

（２）実施詳細

日 時 2025 年 1 月 25 日（土） 10：30～12：30（受付 10：00～）

場 所 西南女学院大学 741 教室

参加者 38 名（子ども 3 名含む）

内 容

1. 開会挨拶・趣旨説明（5 分）

2. 「おはなしづくりのコツ・アドバイス」（はしもと先生講義）（30 分）

3. 個人ワーク（5 分）

簡単に個人でおはなしを考える

4. グループワーク（30 分）

「3」をグループで共有しながら、グループで一つのおはなしを作る

5. 発表・はしもと先生コメント（40 分）

6. まとめと読み聞かせ（10 分）

4. 活動の振り返り

今回は現場の保育者を中心に定員を 50 名程度と考え準備を進めた。案内については、チラシ（300 枚印刷）を作成し、学生や各種講座などで 12 月より配布するとともに、北九州市保育所連盟様、北九州市

保育士会様、北九州市私立幼稚園連盟様に依頼し、チラシデータを北九州市内の幼稚園、保育所、認定こども園に送っていただいた。最終的な申し込みは45名であった。1月当初の申し込みの状況から個人ワークを考えていたが、参加者が増えたことにより、急遽グループワークへと変更した。そのため、はしもと先生のご負担が増えてしまった。事前の段階で、参加人数に応じた講座の展開の仕方について、準備を進めておくことが必要であったと思われる。

当日は、子どもの参加もあったため、事前に依頼していた補助学生に対応をしていただいた。乳児・幼児・学童と対象に合わせた対応の準備をするためにも、子どもがいる場合は申し込みの際に年齢等も把握できるようにしておくよかった。

講座後にアンケートへの回答者は 32 名であった。そのうち、本日の内容についての項目では、全員が「満足」と回答してくださっていた。本企画については、目的を達成したといえる。

5. 決算

6. 謝辭

7. 資料

【中国茶セミナー2024】

1. 主 催：女性活躍ワーキンググループ

2. WG メンバー：神崎明坤（観光文化学科）、石井美紀代（看護学科）、藤田稔子（保育科）、樋口真己（人文学部）

3. 運営スタッフ：吉原悦子（看護学科）、福永健司（会計課）

観光文化学科 3 年生：入江 和美、土綿 梨央、野上 礼華、渡辺 咲弥
留学生 郭 玉、伍 星雨

4. 概要

（1）背景および目的

「女性活躍ワーキンググループ」では、「女性が輝く」ためにできることを西南女学院から地域へ発信する活動を目指している。女性の関心が高いものに「美容」「健康」がある。この2点と西南女学院の知的財産をかけ合わせ、中国茶をテーマにしたセミナーを 2023 年度に開催し、好評を得たことから、第二弾を計画した。

2024 年度は「比較」をキーワードに、日本・中国における茶文化のつながりを学び、発酵茶や未発酵茶など複数の種類の茶葉を比較しながら何度も試飲できる機会を設けた。また、昨年度は受講生からの講師に多くの質問があったため、講師や受講生同士が交流する機会を設けた。

（2）対象者及び開催日時・開催場所

- ・対象者：市民（28 名/募集定員 30 名）
 - ・中国茶セミナーのホームページを設置、申し込みは web で受付とした。
 - ・開催告知は、チラシの配布、福岡県及び北九州市の生涯学習情報提供サイト、地域連携室 facebook、Instagram の広告を使用し行った。
- ・開催日時：2024 年 9 月 27 日（土）13 時 30 分～15 時（受付：13 時）
- ・開催場所：d³ Gallery（ディーキューブギャラリー）

（3）実施内容

1) 学内プレセミナー

- ・内 容：数種類の中国茶の解説をもとに試飲し、五感を使って比較体験をしてもらう。
- ・開催日時：2024 年 9 月 5 日（木）14 時～15 時過ぎ
- ・開催場所：7 号館 1 階食堂
- ・講師：観光文化学科 教授 神崎明坤
- ・参加者：学内教職員 9 名

2) 中国茶セミナー2024

内 容【第 1 部】比較して学ぼう！

日本茶・中国茶の歴史を解説するとともに、茶葉の種類について解説を行う。

【第2部】比較して味わおう！

茶葉の違いで3ブースに分け、それぞれのブースで試飲し、比較してもらう。

【未発酵茶】 緑茶 × ジャスミン茶

【烏龍茶】 黒烏龍茶 × 鉄観音茶

【普洱茶】 未発酵茶 × 発酵茶

【白茶】

講 師：観光文化学科 教授 神崎明坤

5. 評価

事前に学内プレセミナーを実施したことで、準備茶葉や茶道具の手配、当日の流れの打ち合わせがスムーズに進んだ。また、運営スタッフは裏方で準備し、学生スタッフが中国茶の作法を事前に指導を受けて振る舞いもてなしたことは、大学教育のアピールにもつながったと考える。

参加者は、リピーター及び前回参加者からの勧めで参加した人が半数を占めていることがわかった。このことは、関心の高いテーマであったこと、前回のセミナーが好評であったことがうかがえる。今回のセミナー終了時の参加者にアンケートの結果を見ると、セミナー内容について「満足」及び「やや満足」の回答が大半を占めた。また、自由記載では「いろいろなお茶をたくさん飲み比べることができてよい経験ができました。」「使用する茶道具がいろいろあって興味深かった。」「いつか本場の中国でお茶をめぐる度をしたいです。」といった感想が寄せられた。

今回は第1回目と異なり参加者が自由に席を立てて飲み比べることもできたため、講師の神崎教授との質疑応答や交流、及び中国人留学生もスタッフとして参加していたこともあり、活版な交流が行われた。

一方、音響マイクの不良及び講演時間短縮のために白版ボードを用意しなかったための改善要望があったため、今後の改善点とし、対策を練っていきたい。

6. 経費

¥14,000（参加費一人500円）、¥100,000（芳賀文化財団の活動助成金）より支出。

7. 振り返りと今後の予定

今回は2回目の開催ということで、第1回目のアンケート結果や運営スタッフの意見をもとに、企画を行った。今回7種類の中国茶を飲み比べる機会を設けたため、効率的に試飲できるように運営上の工夫を行ったことで、アンケート結果でもこの飲み比べが貴重な体験であったという感想が多く、盛会裏に終了したと思う。また、参加者や講師との交流の機会をもつことも参加者のニーズを満足したのではないだろうか。

来年度3回目を企画するにあたり、開催日程も含め、参加者の要望を踏まえた内容で開催したい。

今回のセミナー盛会の裏では、多くの方々のご協力があった。特に、中国茶を本場の中国からの仕入れや運搬等では神崎先生及び先生のご家族のご協力、及びd³ Galleryのスタッフの方に様々なご便宜を図っていただいた。また、芳賀文化財団から活動助成金をいただき運営することができた。皆様に、感謝申しあげたい。

8. 添付資料

(1) 広報用チラシ及び申込用ホームページ



(2) 写真資料



【後期北九州市民カレッジ】

1. 高等教育機関提携コース

(1) 概要

本学では、地域の皆様の多様な学習ニーズに対応した生涯学習機会を提供し、自己実現の促進を図ることを目的に、「令和6年度後期北九州市民カレッジ」を開講している。今年度は、11月1日～12月13日の6回シリーズで実施した。

(2) 全体テーマ 少し違った視点から見るのも楽しい

人文学部と短期大学部の教員が講師を務め、それぞれが得意としている専門分野について、一般の方が普段は意識して見ないような視点からの解説や具体例の紹介を行った。

(3) 各講座のテーマ

第1回：映画字幕の裏側のセリフ

担 当：人文学部観光文化学科 教授 八尋 春海

内 容：映画翻訳の仕事について紹介した。字幕は様々な制約があるため、実際のセリフとは異なることなど、映画を視聴しながら具体例を挙げて解説した。



第2回：バレーボール観戦の楽しみ方

担 当：短期大学部保育科 准教授 篠木 賢一

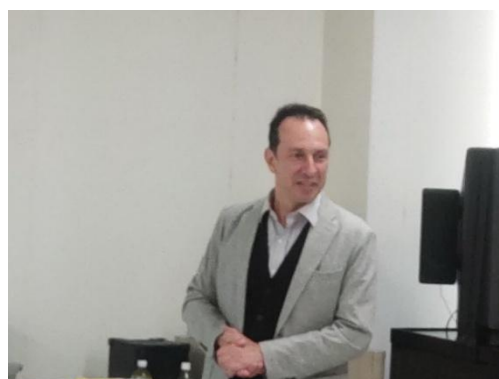
内 容：バレーボールの見方について紹介した。試合中、選手が何を考え、指導者がどのような指示を出しているか、本学バレー部選手のデータをもとに解説した。



第3回：多文化・多言語社会を覗く

担 当：人文学部英語学科 講師 アンデリュウ・ジッツマン

内 容：複数の文化や言語が存在する中で人々が経験する利点と課題について解説した。また、多文化社会であるカナダの政策、そこからみた日本の現状についても解説した。



第4回：北九州から考える英語の未来！

担 当：人文学部英語学科 教授 塚本 美紀

内 容：英語が国際共通語となった経緯や世界中で英語を話す人が増加している現状について解説した。また、アジア圏で開催された会議での英語を用いた交流について、体験談を紹介した。



第5回：異文化圏への軟着陸～日中観光文化の違いについて～

担 当：人文学部観光文化学科 教授 劉 明

内 容：日本と中国には、稲作文化、儒教、漢字など多くの共通点が存在しながら、過去に相互交流が少なかった事について解説した。また、両国の観光文化について、事例を用いて紹介した。



第6回：ファンタジーは心のふるさと～人にしかない感動する力とは～

担当：短期大学部保育科 教授 戸田 由美

内容：科学の発達により、キリスト教に根ざした思考原理が根底から揺らぐ中、ファンタジー的発想が人びとの心の中の調和をもたらしたことをファンタジー小説「トムは真夜中の庭で」をもとに考察した。



（４）受講生数

受講者数 13 名、スポット受講生数 9 名。

（５）総括

今年度は、映画、スポーツ、文化、言語、文学等を普段とは異なる視点・角度から、味わう（楽しむ）ことをテーマに、講座を実施した。受講後のアンケート結果は、総じて好評であり、実際に講義においても参加者の活発な意見や質疑が見られた。

次年度も受講生の興味・関心を踏まえた講座を企画・運営したい。

2. 大学連携リレー講座

（１）概要

北九州市民カレッジにおいて、あらかじめ設定した「共通テーマ」に対し、大学の専門性や特性を活かした講座企画を募集し、複数の大学による連携講座を実施している。本学から1名が毎年講師として参加している。

（２）全体テーマ

「大学の魅力！地域に発信！！」「大学だけではもったいない！名物講師大紹介！」「実は、、、意外な分野が得意です！！」など、地域みなさんに大学の魅力を発信する講座。

（３）担当講師

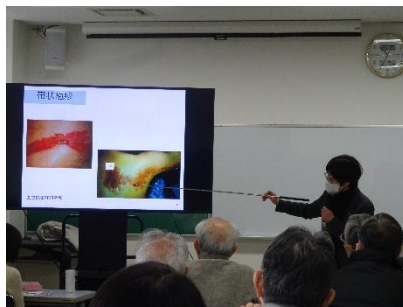
保健福祉学部看護学科 教授 目野 郁子

（４）講座テーマ 「大人の感染症『带状疱疹』」

「带状疱疹」は、免疫低下により発症するウイルスが原因の疾患である。初感染後、神経節に潜んだウイルスは、免疫低下により再活性化を起こす。

この講座では、「带状疱疹」の発症の仕組み、症状、治療と予防法について解説した。

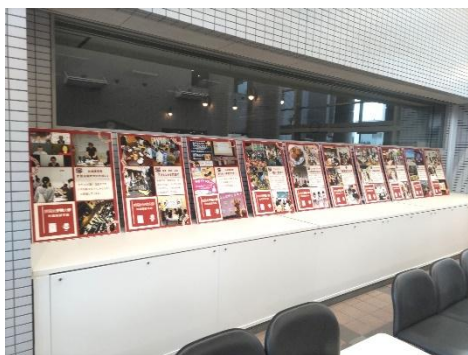
受講生から多くの質問があり、この感染症について関心が高いことがわかった。



【広報活動】

1. 地域活動パネルの制作・展示

今年度地域連携室に申請のあった活動を中心にパネルを制作し、6号館1階ラウンジに卒業生パネルと一緒に展示している。また、卒業生パネルはオープンキャンパスの際も展示した。



2. Facebook／Instagram

今年度途中からFacebookだけでなく、インスタグラムを解説し、地域連携室主催のイベントや、ゼミや学外活動で取り組んでいる地域貢献活動をお知らせし、学内外への広報を積極的に行った。また、今年度も中国茶セミナー開催のため、Facebook/Instagramの広告を利用することで、参加者を募った。

3. 毎月の地域貢献活動ポスターを制作・展示

月初めに、その月に実施予定の地域貢献活動を一覧にしたものをポスターにし、正門横などの掲板や学内電子掲示板を利用し、広く活動を紹介した。



今につながる力

―学内ボランティア「だいすきにつぼん」の活動から得たこと―

学校法人星学園星幼稚園教諭 上谷田 幸奈

(短期大学部保育科 2018 年度卒業)

短大進学のために鹿児島から北九州へ出てきました。卒業後は地元に戻り就職したため北九州に居たのはたったの2年間でした。しかしその2年間で北九州という土地が大好きになり、私の人生の中で宝物だと言い切れるぐらいかけがえのない時間になったのは間違いなく「だいすきにつぼん」があったからだと思います。



入学当初。何か人のためになる事がしたい、そんな思いから保育科の藤田先生の授業で紹介されたボランティア活動「だいすきにつぼん」に参加しました。「だいすきにつぼん」は「食と遊び」がテーマで年に5〜6回、学内にて地域の児童が親子で参加できる活動です。「食」は栄養学科の学生が、「遊び」は福祉学科、保育科、英語学科の学生が中心になり、年中行事や北九州の産物にちなんだテーマを決め、学生と親子で調理体験をし、遊ぶといった活動でした。この活動の大きな魅力の一つは学生主体で取り組める環境を頂けたことです。学部学科、学年の垣根を越えた学生たちが互いに意見を出し合い、力を合わせて企画→準備→実行→振り返りと、先生方のアドバイス、お力添えの元、取り組ませてもらえました。



1年目は主体的に動く先輩方の姿を目の前で見て、学び、楽しみながら取り組ませてもらいました。2年目になり、企画から考える立場になった時、いつも念頭には「何をしたいか」、この限られた活動の中で地域子ども達に「何を伝えていきたいか」がありました。その思いは「活動をより良くしたい!」と活動への活力になって

いました。私が自然とそう思えたのも先輩方、先生方の妥協する事なく真剣に活動に向き合う「カッコいい姿」を1年目に見せて頂けたからです。又、活動に際し先生方が外部の方々とも連携を取って下さり、学内だけでなく社会との繋がりを肌で感じ、貴重な体験をさせてもらうことができました。

今私は幼稚園教諭として7年目を迎えようとしており、現場では年間を通し、園内のカリキュラムを毎日考えています。子どもの成長のため、行事のためにすべき事は沢山あり、その合間で「したい活動」を考え行っています。考え方の軸は学生当時から今現在も変わりません。判断基準は学生の頃と同様「何をしたいか」「何を伝えていきたいか」です。子どもの成長は早く、興味関心を持つ物の変化も早いです。園児が今何に興味があり、何がしたいか、同時に、限られた園生活で何を伝えていきたいかを常に考えています。忙しい日々の中でも、「したい活動」に取り組もうと意欲を持ててい



るのは、学生時代に「だいすきにつぼん」で活動を終えた後の子ども達の喜ぶ顔を実際に経験し、肌で感じてきたからです。又、短大時代に学生みんなが対等に意見を出し合い、企画し、何かを作ろうとやり遂げられる環境を作り、サポートして下さった先生方の行動や言葉を思い返し、困った時には当時の先生だったらどうしていただろうかと考える事で導かれています。

学校は先輩方、先生方が近くで寄り添い、経験をさせてもらえる貴重な環境でした。その時の経験が、今の自信となり、意欲的に動いています。短大時代の2年間は働く自分の考えとなる主軸を得られた尊い時間だったと強く感じます。授業とは違うボランティア活動などは、授業やアルバイトでは得ることの出来ない学びある経験であり、きっと社会に出て自分を助けてくれる大きなお守りになってくれると思います。学生の皆さんにもこの先の社会人ライフを楽しみながら豊かに過ごして欲しい思いでいっぱいです。この限られた学生の時間で、今しか出来ない貴重な経験を沢山し、その思いを子どもや次世代に繋いで欲しいです。



マスメディアに見る地域連携室 2024 年度の歩み ～地域連携室の足跡～

2024 年 7 月 3 日（火）毎日新聞 朝刊

社会問題解決への産学官連携 「西南女学院大」「第一ピア」「みやこ町」
まちづくり キャリア教育推進

2024 年 8 月 1 日（木）西日本新聞 朝刊

みやこ町 地域課題解決へ連携協定 西南女学院大、第一ピアサービス
街づくりに提案や助言

2024 年 12 月 23 日（月）西日本新聞 朝刊

北九州モノレール「かわいい」
西南女学院大と小倉商高 ヘアメイクなどの企画

地域貢献活動報告 2024

2025 年 3 月 7 日発行

編集発行	西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部
地	域
連	携
室	
	〒803-0835 北九州市小倉北区井堀 1 丁目 3 番 5 号
	電話 093 (583) 5243
印	刷
	モ リ プ リ ン テ ィ ン グ 株 式 会 社
	〒806-0049 北九州市八幡西区穴生 3 丁目 11 番 5 号



西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

地域連携室

〒803-0835 北九州市小倉北区井堀 1-3-5



西南女学院は 2022 年に創立 100 周年を迎えました。